

AACH 97 キシュトワール・ヒマラヤ遠征 報告書 ドーダ峰 (6,550m)

Published Mar 14, 1998 (HTML version May 18, 1998)

序

[グラビア](#)

第1部
登山報告

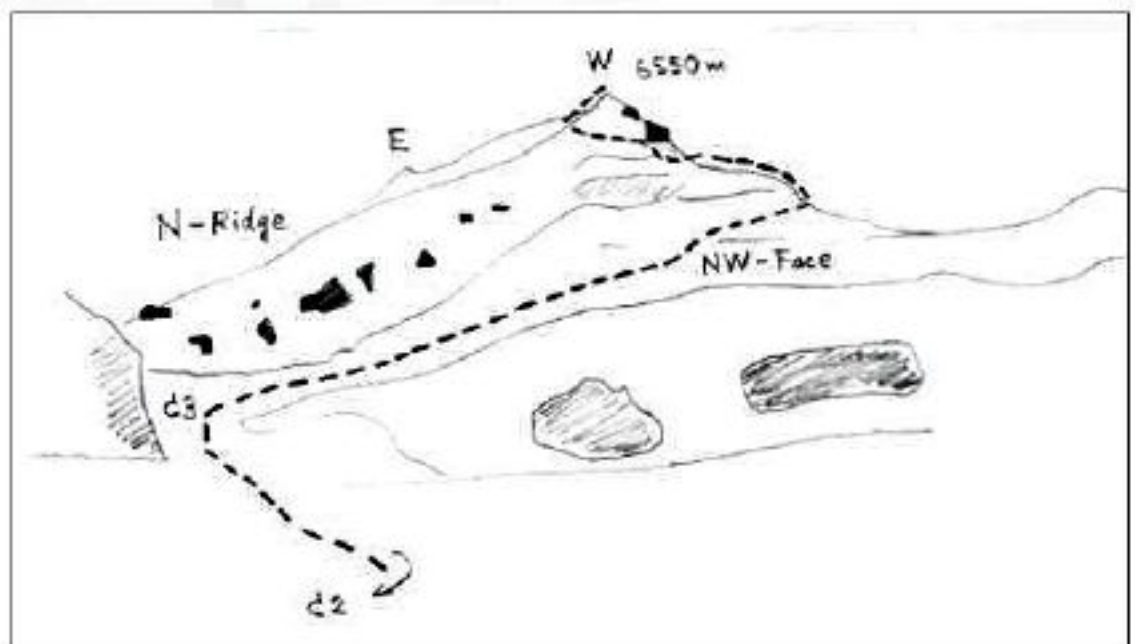
- [計画と行動概要](#)
- [遠征地図](#)
- [行動表](#)
- [写真で追う遠征記録](#)

- ・ [出国](#)
- ・ [デリー](#)
- ・ [マナリ](#)
- ・ [ロータン・パス](#)
- ・ [チベットへ](#)
- ・ [レー](#)
- ・ [パキスタン国境](#)
- ・ [カルギル](#)
- ・ [ヌン・クン](#)
- ・ [リンドン・ゴンパ](#)
- ・ [Z3とドゥルン](#)
 - ・ [ドゥルン氷河](#)
- ・ [BC設営](#)
- ・ [氷河へ](#)
- ・ [C1設置](#)
- ・ [クレバス帯を進む](#)
- ・ [C2設置](#)
- ・ [ドーダ発見](#)
- ・ [C3~](#)
 - ・ [アタック](#)
 - ・ [単調な登り](#)
 - ・ [ピーク直下のトラバース](#)
 - ・ [最後の登り~](#)
 - ・ [頂上にて](#)
 - ・ [ヒッチハイク](#)
 - ・ [ドクサ村にて](#)
 - ・ [トラックきたる](#)



ドーダ峰

Mt. Doda, the upper part of the Durung Drung Galcier



登頂上ルート

第2部
資料

- [装備](#)
- [医療](#)
- [食料](#)

- [渉外](#)
- [会計](#)
- [気象](#)
- [研究](#)

[「インド北部・キシュトワールヒマラヤ山岳地域における顕花植物の分布」](#)

- [登山史](#)

[ご協力者](#)

[回想
\(最後に\)](#)



序

山岳部部长 松田 彊

北海道大学山岳部キシウトワール・ヒマラヤ遠征隊が、目指すドーダ峰の登頂に成功した。この成功は、隊長の辺見君をはじめとする現役部員と若きOBが力を合わせた結果であり、彼らの熱意と努力にあらためて敬意を表したい。

近年、現役を主とする海外での活動が活発に行われるようになった。しかし、これは単に憧れや背伸びではなく、海外の山々を含めて着実に活動の範囲を広げてきた結果と思われる。この度の遠征の成功はまさにそれであろう。現役諸君にはこれらの実績を踏まえ、さらなる精進と活躍が望まれる。

しかし、この度の遠征に際しても、北大山の会会員諸氏を「はじめ多くの方々にご援助を頂いた。あらためて関係各位には厚く御礼申し上げるとともに、今後とも益々のご指導とご鞭撻を頂くようお願いする。

1998年 2月

エーデルワイス（リンドンゴンパにて）



グラビア

絵をクリックすると大きくなります。



2 . キャンプ 1 への荷上げ Climbing up to camp 1(4620m)



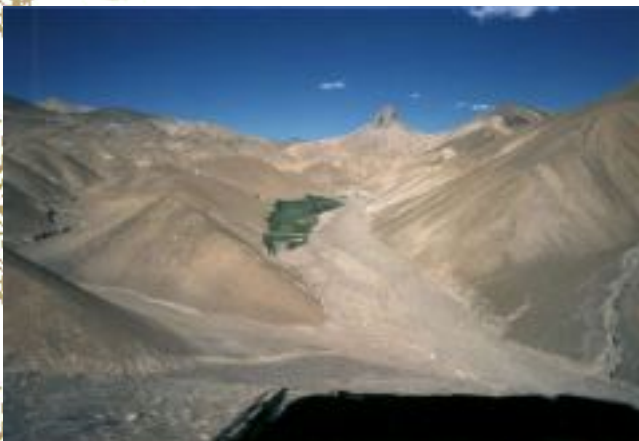
3 . クレバス帯 On crevasses area at the height of 5000 meters



4 . 雪原 The vast snowfield from camp 2(5120m) to camp 3(5620m)



5 . ピーク直下 Below the summit



6 . 月世界 On the way from Leh to Kargil



7 . 紙ふうせんで遊ぶ少年 Local boy at a summer village named the Boks







計画と行動概要

計画

- 登山隊の名称： A.A.C.H. Kishtwar Himalaya Expedition 1997
目標とする山： ドーダ峰（6550m）
登攀ルート： ドゥルン・ドゥルン氷河を最奥までつめ、北西面経由で往復
キャンプ位置： ベースキャンプ（BC）の他にC1 - C3の3つの上部キャンプを設置する。
- BCは氷河左岸の草地(4250m)、C1は平坦な氷河上(4750m)
 - C2はアイスフォールを登り切った氷河右岸(5200m)
 - C3は氷河をつめきったところのピークに対して北西面に広がる雪面の傾斜の変わり目(5700m)とする。

メンバー

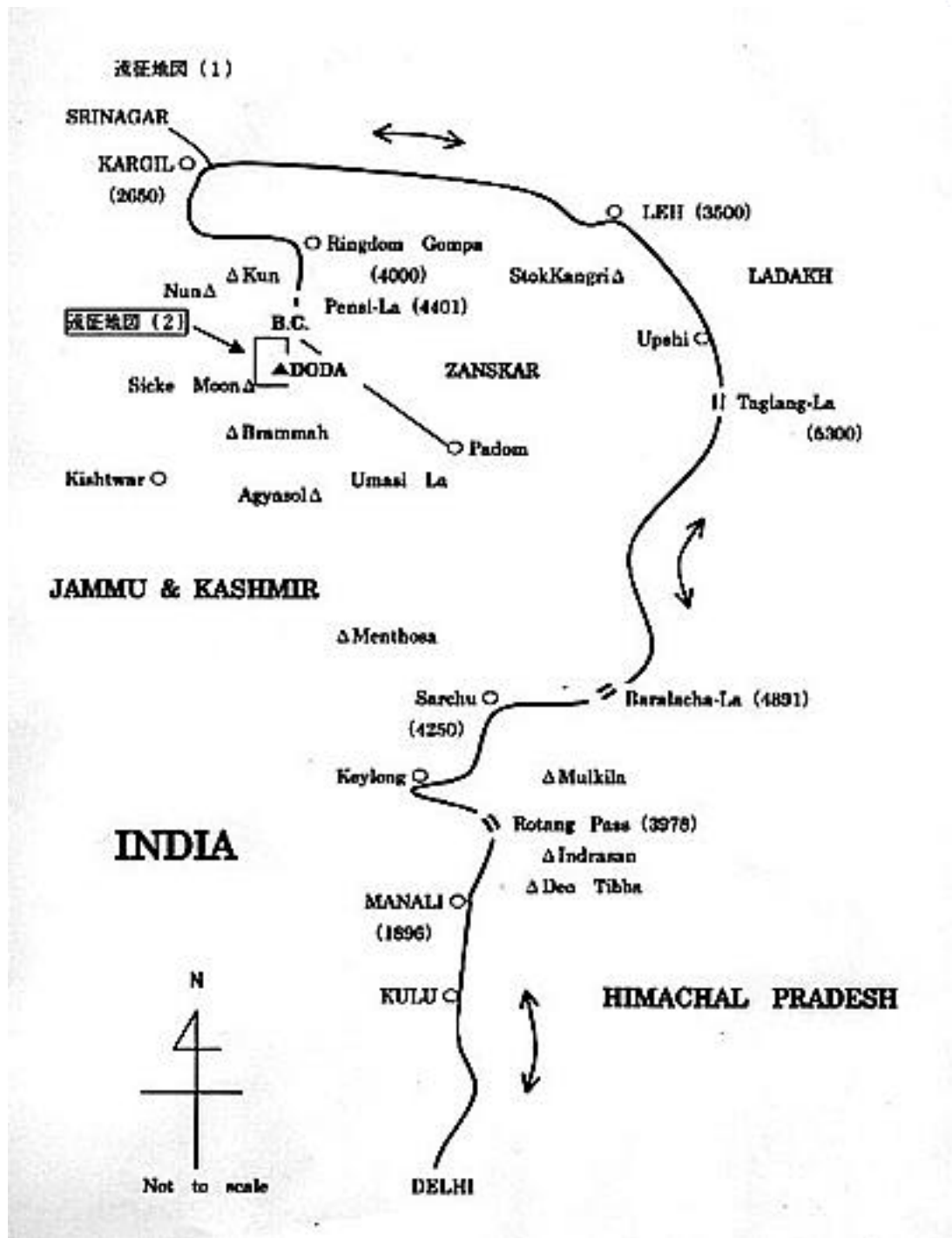
- L 辺見 悟（6） 北海道大学理学部学生 登攀計画・渉外・食料
AL 本多和茂（OB） 専修短大講師 医療・渉外
M 小倉憲悟（OB） 平成8年度北海道大学卒 装備・会計
野入善史（3） 北海道大学水産学部学生 記録・気象

リソ
ワセー Captain Sinha (24) Army 登山歴3ヶ月 渉外全般

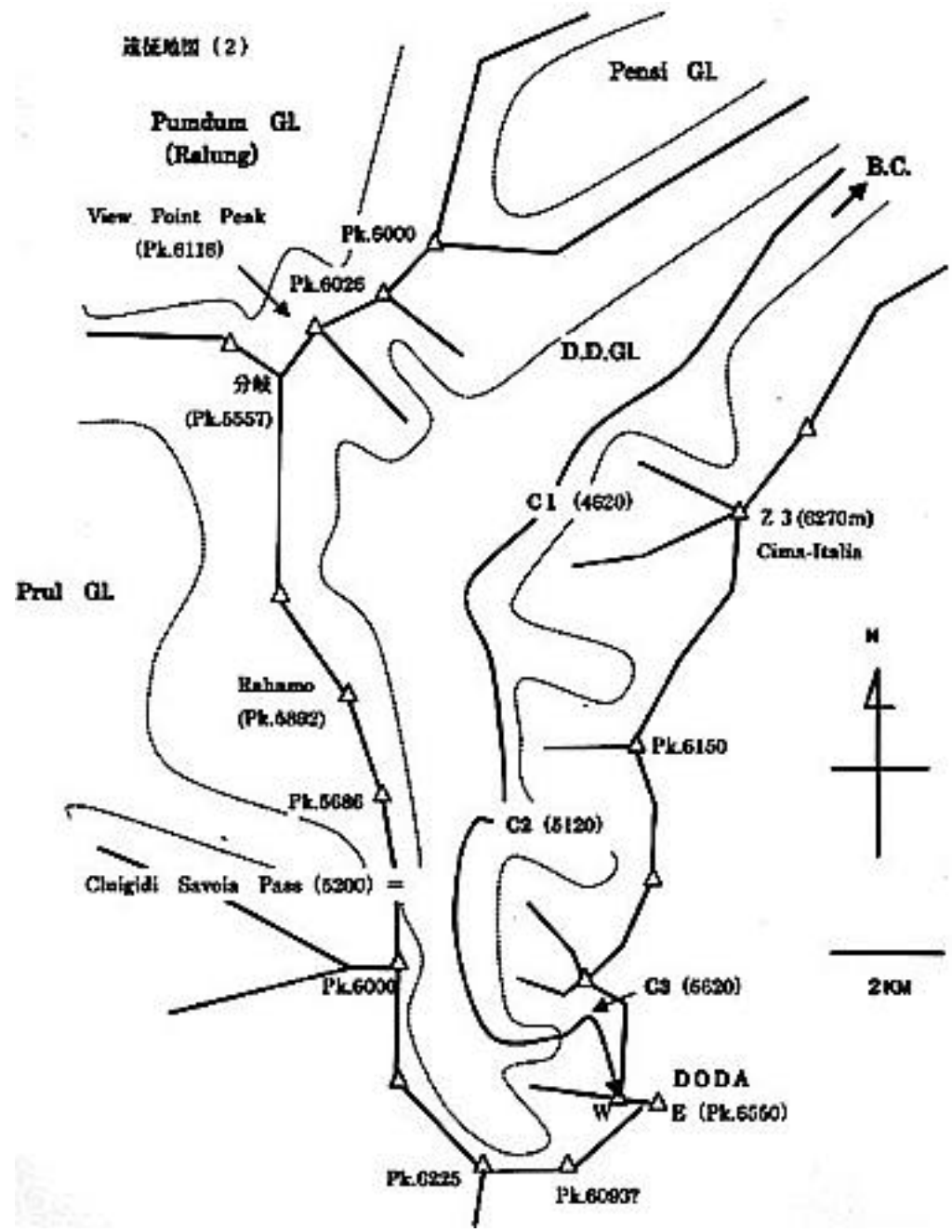
行動概要

7. 10 先発隊（辺見）デリー到着
17 後発隊（本多、小倉、野入）デリー到着
19 デリー マナリ(1,896m)（チャーターバス）
20 マナリ ジスパ(3,142m)（ミニバス） ロータンパス(3,978m)越え
21 ジスパ レー(3,500m) タグラン・ラ(5,300m)越え
22 - 23 レーにて高所順応活動
24 レー カルギル(2,650m)（バス）
26 カルギル リンドン・ゴンパ(4,000m)（バス）
27 リンドン・ゴンパ ペンシ・ラ(4,401m) BC(4,250m)建設
28 C1(4,620m)建設
8. 3 C2(5,120m)建設
9 C3(5,620m)建設
13 ドーダ峰(6,550m)全員登頂
17 BC撤収
20 カルギル着（トラック）
22 レー着（ローカルバス）
24 - 25 レー サルチュ(4,253m) マナリ（トラック）
28 デリー着（デラックスバス）

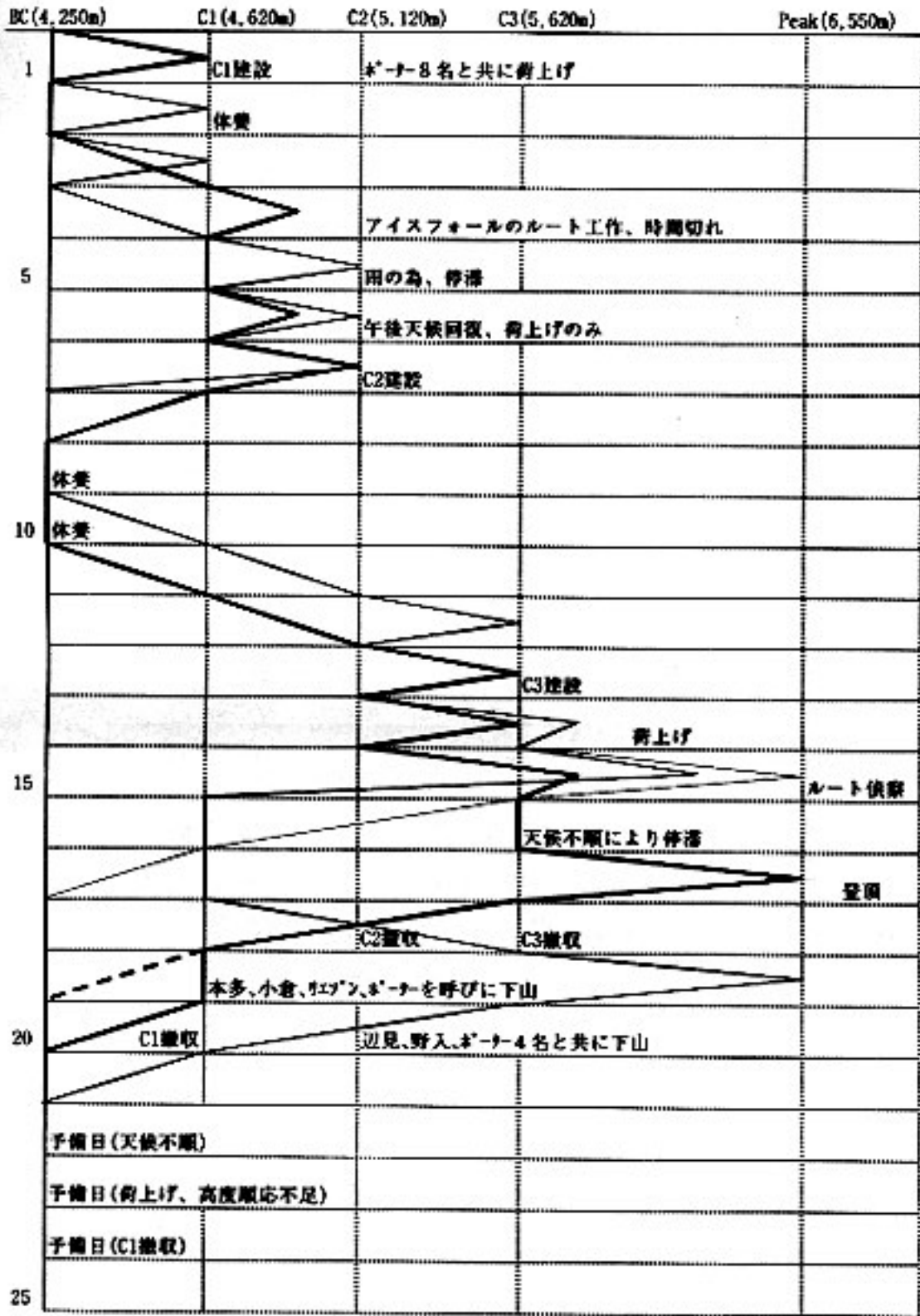
地图



遠征地圖 (2)



行動表



実際の行動

計画

出国



1.手を振る友に、笑顔で
答え...



2.身につけられるものは
身につける

デリー



3 . 出発前夜、IBEX
EXPEDITIONSのマン
ディプが自宅でパーティを
開いてくれた

7月17日、後発隊がデリーに到着。ミネラルウォーター片手に、オートリキシャーで街を走り回っていた先発の辺見と合流した。モンスーンに入り、幾分気温は低くなっているとは言え、一日中動きまわる気がしないのも事実だ。出国祝いに高級レストランへ向かう。日本では感じることのない上流階級にふれた。

マナリ



7月19日夜、マナリに到着した。デリーから560 km、16時間のバスの旅はやはり疲れた。ホテルは「地球の歩き方」で決めた。標高は2000m近く、朝晩は涼しい。

私たちのリエゾンオフィサー、シーナは自分専用のシングルルームはいらないという。そこで、2人部屋を2つ頼み、3人が2人用ベッドで寝ることにした。場所決めは彼をまじえてのジャイケン。早速ホテルのおやじと相談し、レーまでのバスを確保する。

4 . 山々にはヒマラヤ杉が密生している



5 . この日からシーナとの共同生活が始まった

ロータン・パス



6 . 咲き乱れる花々

ロータン・パスを越えると風景は一変する。ちょうどヒマラヤ山脈の背骨にあたる峠で、ドライエリアとモンスーン気候の境になっている。標高3978m。バスで登ってきたせいか、高度による影響は感じない。ロータン・パスからしばらくすれば、チベット人の世界である。



7 . ロータン・パス全景



8 . いっしょに踊った

チベットへ

レーまでバスで二日行程。途中、ジスパのIBEX HOTELで泊る。標高3100m程度であるが、翌朝、隊員に高度障害が出始めた。サルチュは標高4250m。周辺は草木すらないガレ山。車道の脇にいくつかのチベット式住居があるだけ。なかにはパラシュートで作ったものもある。

景色の変化に乏しいなか、バスは走る。大自然は退屈だ。頭痛が加わり、会話は無い。バラチャ・ラ(4891m)、マラング・ラ(5000m)の峠を越えてゆく。放置されたタールのドラム缶が道標代わりになっている。このあたりにはユキヒョウがいて、昨日は羊が1頭やられたそうだ。皆、頭痛薬などを飲んで、レーまでの峠をやり過ごす作戦をとる。しかし、車道では世界第2位のタグラン・ラ(5300m)では、頭痛は頂点に達した。



9. サルチュ(4250m)での昼食。まったく食欲がない



10. ここは40kmほど直線道路がつづく

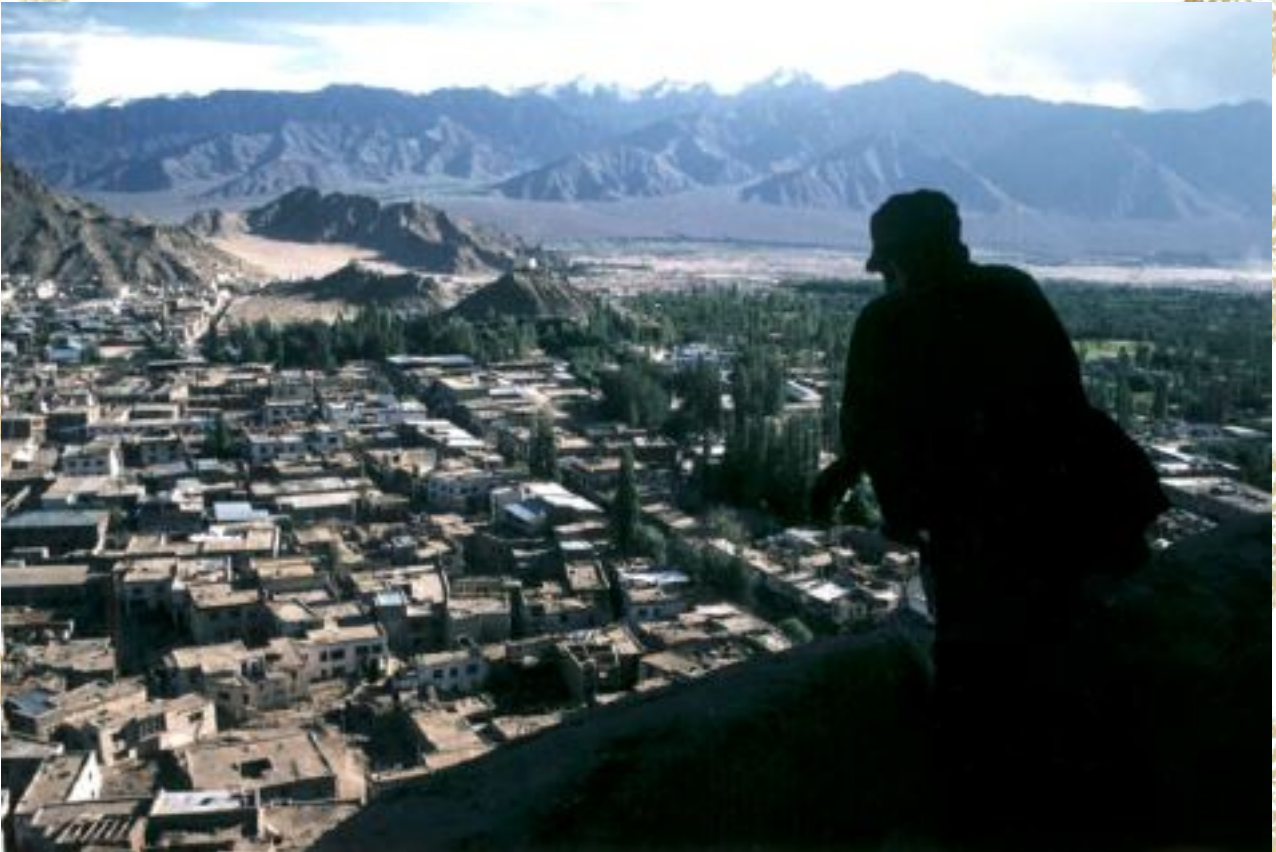


1 1 . 熱気のデリーを立って3日目。5300mの峠で震えている



レー

7月21日夜、高度による頭痛がおさまらぬままレーに着いた。小雨が降っていた。疲労と高度障害のために思考能力は鈍り、とりあえず近くのホテルに隊荷を運んだ。ホテルの階段を上がるのにも息が切れる。ここはインダス河の上流部。チベット高原の西のはし。標高3500m。完全にチベット民族で、デリーと違い心理的に安心する。レーには高所順応のために3日間滞在した。デリーから飛行機で一時間半のため目抜通りは観光客が多いが、一步小路を入れば昔ながらの生活を読み取ることができる。



1・2．王宮よりレーの町を見下ろす。インダス川の向こうにはストック山群が見える

レーの町にて



レーの町にて



13 . マニ車



14 . ゴンパに行くところ



15 . ポロチームが通る



16 . 赤ん坊





パキスタン国境をゆく

7月25日、新たにコックとキッチンボーイを加え、レーの街を後にした。すっきりしなかった天気も、カルギルに近づくにつれ、だんだんと日差しの強さが増してきた。途中、マニ教徒とイスラム教徒が混在するいくつかの村をすぎた。道路に沿いパキスタンとの国境が走り、近いところでは数kmだ。途中、検問所でトランプをやっている役人をビデオに撮ろうとしたら、難癖をつけられ、一たん、警察署に戻らされる一幕もあった。



19 . 乾燥地帯をゆく



20 . 我らがバスはよくエンコした



21 . 子供たちはどこでも元気で、屈託のない笑顔を私たちに向けてくれる

カルギル

カルギルはスリナガル～レー間の中間点に当たる。イスラム教徒の町である。顔立ちもレーと異なり、端正になる。強烈な日差しが照り付け、外を歩くだけで消耗する。一方、ホテルに入ると冷房が効いているかの錯覚をもよおす。すぐ北にはパキスタン国境が走り、アーミーのトラックが行き来する。この町で生鮮食料品の買い出しをした。酒は売っておらず、シーナの友達の軍人から安く買い上げた。食事に呼ばれ、帰り1950年代製の日産のジープに送ってもらう。日本製の車は古くても丈夫でかなり貴重なようだ。シーナも覚えたので、この日から暇があれば、ナポレオンに興じるようになった。部屋決めのジャンケンも日課になった。



22 . オアシスの町



23 . カルギルのメインストリート



24 . 鶏の買付け



25 . イスラムの女の子

ヌン・クン

カルギルよりスル川に沿ってバスは進む。途中、ヌン・クンの山容が望まれた。ヒマラヤ新参者の二名は、えらく揺れるバスの車窓からカメラを突き出し、シャッターを押し始めた。皆、山登りに来たのだ、という感覚を取り戻す。柳の木陰のここちよいこと。



26 . ヌン (7135m、右) ・クン (7077m、左) まわりに高い山がないせいか、立派に見える

リンドン・ゴンパ

ひとしきり人家のないところを走ると、マニ教の世界に戻り、顔も変わった。道路脇にあるチョルテンがマニ教の世界になったことを教えてくれる。人々はヤクを放牧し、生計を立てている。ヤクといっても牛との混血が多い。ヤクはただでさえ少ない草地を剥ぎ取るように食み、五分がりにしてゆく。7月26日、リンドン・ゴンパのレストハウスに泊まる。標高4000m。レーで順応したせい、皆食欲旺盛である。周辺にはエーデルワイスが群落を成している。



27 . 箸の使い方を教える



28 . 僧侶たち



29 . 広河原の丘にリンドン・ゴンパは建っている

Z 3 とドゥルン・ドゥルン氷河



3.0 . ペンシ・ラ (4401m) を過ぎると、Z3(6270m)とドゥルン・ドゥルン氷河が目飛び込んで来る。

ベースキャンプ設営

7月27日、デリーを発って9日目、車道から100mほど下ろした草地にベースキャンプ(4250m)を設けた。歩いて5分とかからないところ。途中の村でポーターを調達しようとしたが、値段が折り合わず、結局4人しか集まらなかった。BCの隣には別の住人が居た。放牧のための夏季村(ドクサ村)である。夜、ポーターとともに焚き火を囲み、チャン(どぶるく)を回した。広々として開放感のあるベースキャンプ。ベースキャンプではいつもよい天気だった。



31. ベースキャンプ設営風景



32. 食べるのはかわいそうだが、うまい



33 . 子供たちのアルバイト 報酬はばんめしの残りもの



34 . ブルーシートをかぶせて、岩小屋のできあがり



氷河へ

7月28日、ポーター8名と共にキャンプ1(4620m)建設のためベースキャンプを出発した。ベースキャンプから下り気味にトラバースし、氷河左岸のサイドモレーンに突入する。歩きにくいことこの上ない。ポーターは各自20kg程度の荷物を背負っているが、断然、隊員より早く歩く。後日、最良のルートにケルンとピンクテープでルート整備をした。

氷河上に出れば、ポーター達が「ジュレイー、ジュレイー」と叫び、花々を頭上に撒き、私たちの帽子に花飾りをつけてくれた。安全祈願だそうだ。褐色のこの地にこれほどの質量を持った氷河が生産されていることに違和感を覚える。



35 . モレーンと違いとても歩きやすい。



36 . ラ・ハーモ(6000m、右)、無名峰(6000m、左奥) キャンプ1までもうすこし



37 . 氷河の上にも川が流れる



キャンプ1設置



38 . 氷河左岸に位置する6000m峰



39 . 食事風景

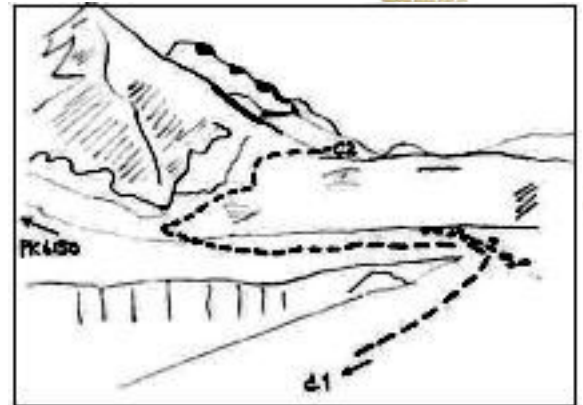
7月28日、地元ポーター8名と共にキャンプ1を氷河右岸に設けた。標高4620m地点である。ベースキャンプから水平距離で12km。とても往復する気にはならない。荷上げ当日は、ベースキャンプに日が落ちてから帰着するものが多かった。キャンプ1は上部活動の根拠地で、大量の食料を荷上げた。



40 . Z3(6270m)の壁が、まじかにそびえる。凧上げの練習をした

クレバス帯をすすむ

キャンプ1からしばらく進めば、オープンクレバス帯が出てくる。判断は容易。氷河右岸の支流の向こうにはP K 6150峰が見えた。'86に東京都高体連隊が登ったピークである。この支流を越えると前年に積もった雪が残り、ヒドゥンクレバスが出てきた。ザイルを出して慎重に進む。幅5,6 kmに及ぶ傾斜の伴ったヒドゥンクレバス帯である。氷河中央部は荒っぽく乱雑にクレバスが口を開け、一方両岸はやさしそうな様相を呈している。登路を右岸の岩とのコンタクトラインに決め、荷上げに励む。下から見るとほんのしわにしか見えなかったものも、近くに寄れば立派なクレバスである。ときには、スノーブリッジを渡る。トップは気持ちの悪いことこの上ない。このクレバス帯で、300mほどフィックスロープを使用した。



4-1 オープンクレバス帯



4 2 . PK6150峰



4 3 . クレバス帯にて

キャンプ2建設

クレバス帯が終わると、ふたたび氷河は平坦になった。行く手にはすばらしい雪原がひろがっている。"飛行場"という形容がピッタリだ。

8月3日、その片隅の標高5120m地点にキャンプ2を設営した。Z3は、ベースキャンプから眺めるまぶしい白とは、対称的に黒い壁を見せている。



44 . 氷河下流部を見やる



45 . プルール氷河方面

ドーダ発見

キャンプ2から氷河中央部に一旦トラバース気味に下り、氷河中央を溯る。だだっ広い雪原をすこし歩けば、小尾根越しにドーダが姿を現した。なるほど、周辺ピークに比べ頭ひとつ出ている。感動よりも、安どした。周辺の6000m峰はすべて容易に登れそう。荷上げ中、好天が続いた。休むたびにドーダを見つめる目は、知らず知らずのうちに登高ルートを追っている。非常に静かだ。時折、氷河周辺からの氷塊の崩落や落石で静寂が破られる。はじめは興味深げに眺めていたが、三日目には誰も注意を払わない。



46．長い氷河も終わりが見えた



47．ドーダのふところへ

キャンプ3-アタック

8月9日、キャンプ3を標高5620m地点に建設した。ベースキャンプから23,4kmさかのぼったところ。

12日は視界不良と雪のため、C3で停滞した。ラジオの天気予報がないことに新鮮な緊張感を覚える。8月13日朝、気圧は最低を記録したが、晴れている。気温は-11.5度と冷え込んだ。身も心も引き締まる。



48 . キャンプ3よりシックル・ムーン(6574m)をのぞむ



49 . アタックの朝

単調なのぼり

北西面の雪面が安定していて、ホッとした。少し積もれば一面雪崩そうな雪面が続く。先頭の二人はコンティニュアスで、後続を誘導する。



50 . 遠くにヌン・クンが見えてきた



5 1 . 快調に高度をかせぐ



5 2 . ときおり急な雪面が出てくる

ピーク直下のトラバース

下から見ればザイル1ピッチで済むと思われたピーク直下のトラバースに100mほどフィックスロープを使用した。ザイルを出している間視界がなくなり、時折小雪が舞う天気になった。時間は刻々と過ぎてゆく。お互いコンタクトをとるために大声を出すと、脳の中が酸欠になる。

53. トラバースを始める。うっすらとした新雪の下は氷だ



さいごの登り-頂上にて



54 . 最後の北稜の登りは長く感じた

8月13日午後2時30分、頂上に立った。頂上ではやることがたくさんあった。互いに写真やビデオを撮りあう。昼前からわき始めたガスのため、眺望に恵まれなかった。周りを見下ろす征服感はない。たこは無風のため、上がらなかった。小一時間が過ぎ、マーキングフラッグを当てながらの下山が始まった。



55 . リエゾンオフィサー初めてのピークである

ヒッチハイク

8月17日、ベースキャンプ撤収。ベースキャンプから道路へ隊荷を荷上げし、ヒッチハイクを開始した。'90年には週に3便ほどカルギル～パダム間の定期バスがあったが、スリナガルの政情不安から観光客が減り、週1便になったそうだ。ベースキャンプにいる間、バスやトラックがよく行き来していたようすだったが。楽観視を悔やんでももう遅い。今日もドクサ村にお世話になる。



56 . 車道の脇に荷物を置いて

ドクサ村にて

村の生活は至ってシンプルだ。朝ヤクを放ち、夕方乳を搾る。昼間は前日の乳からギー（バター）を作る。雪に閉ざされる9月一杯まで放牧し、パダムあるいはレーに帰っていく。あれほど余っていた遠征隊の食料はもうない。すべて村の住人にあげたからだ。いまさら返せとは言えない。ツアンパ、グルグル茶の生活だ。シーナは登山中よりも、目を輝かしてこの村での生活を喜んでいる。確かに楽しい。でも米が食いたい。コックとキッチンボーイは夜間道路上に寝て、絶対トラックを逃さない、と言っている。



57. ドクサ村全景



58. この筒で茶とバターと塩を攪拌する

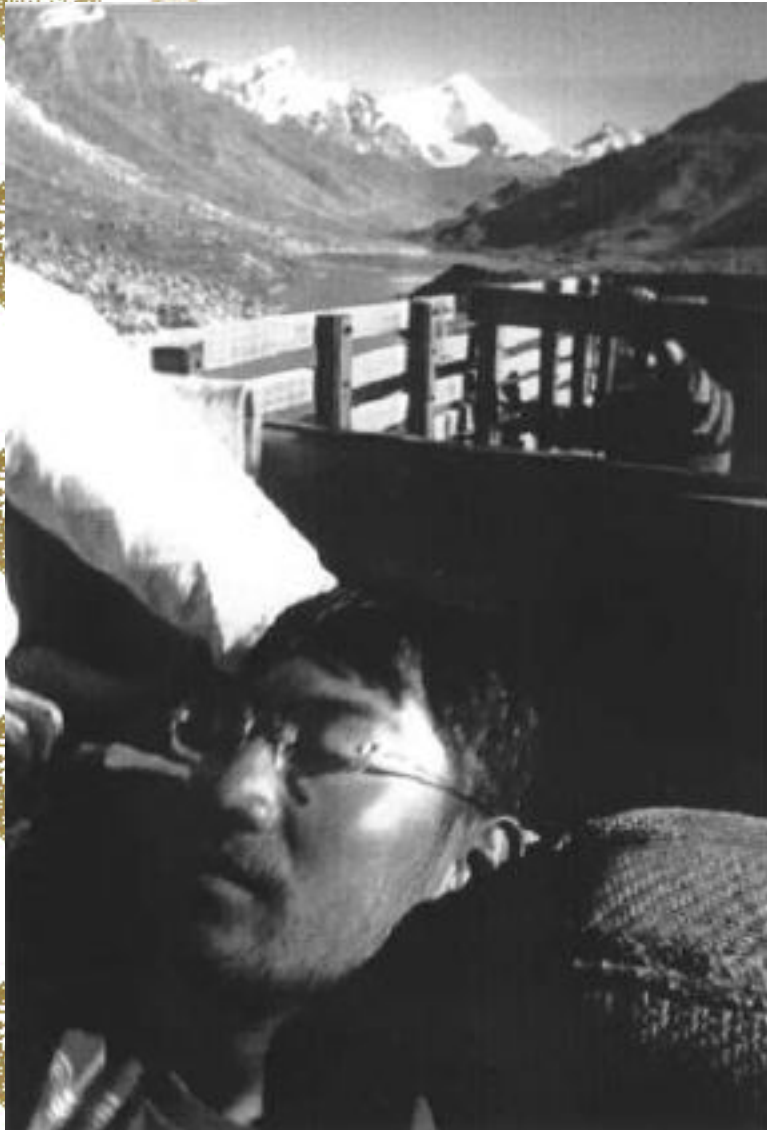


59. ギー（バター）作り



60 . このころにはインドのゲームもたのしんだ

トラック来たる



8月20日早朝、コックの「トラックが来た」との声で目覚め、3日間のドクサ村での生活は終わりを告げた。復路は往路と同じ。登山活動を終えた遠征隊ほど気の抜けた集団はいない。スリナガルに行くのは次回にしておこう。シーナの、インドの一本の道にはそれぞれ異なった文化があり、私たちはその一本を通ったに過ぎない、という言葉が印象に残った。

61. トラックにゆられて

装備報告 (小倉憲悟)

Contents

共同装備についての解説

[・個人装備](#) [・登攀装備](#) [・露營装備](#) [・その他装備](#)

共同装備リスト

・登攀具	・露營具	・炊事具	・衛生
・修理・予備品	・梱包	・その他	

梱包リスト

1. 個人装備

基本的に普段、道内で使用している積雪期装備を用いた。日中の晴天時の行動では、気温が高く、オーバースボンなどは着用する必要はなかった。氷河上の歩行が長いので、各自ストックを使用した。アイスバイルは、積極的に使用する個所は少なかったが、クレバス滑落時の自己脱出のため、C1以上では常に携帯した。その他、日射対策として、各自、帽子、日焼け止めクリーム、リップクリーム、水筒を携帯した。

[\[ページのトップへ\]](#)

2. 登攀装備

フィックスロープは、北稜ルートをとる場合も想定し、計760m用意したが、北西面のルートを選ったので、実際に使用したのは、C1~C2間のクレバス帯に350m、ピーク手前のトラバースに150m、計500mであった。ダンライン 8mmを使用し、長さは50m、60m、100m、240mなどまちまちであった。240mロープは適時、切断して使用した。新しいダンラインはキンクが激しく、ほどくのに大変苦労した。

ルート工作用に、メインロープ 9mm×50mを2本、45mを1本、計3本用意した。パーティを二つに分け、主にコンティニューアスで2本を使用し、1本を予備としてフィックスロープの代用にしたりした。

補助ロープとして、8mm×15mのミニロープを2本用意し、主としてアタック時の先行パーティのコンティニューアス等に使用した。

支点類は、スノーバー、デッドマン、スクリューハーケン、アイスハーケン、ロックハーケン等各種揃えた。雪面にはスノーバー、デッドマンが、氷結部分にはスクリューハーケンが有効であったが、アイスハーケン、ロックハー

ケンは使用しなかった。

非常時の救助用に各自、滑車を携帯したが、幸いにも使用することはなかった。

[\[ページのトップへ\]](#)

3. 露営装備

BCには、エーエージェントが用意したメステント、キッチンテント、リエゾンのテントを張った。C1には荷上げした荷物を置くために4人用ドームテントを一張り張った。隊員用には4人用ドームテント1張りを使用し、随時荷上げして、リエゾンを含めた五人が二つのテントに分かれて泊った。

BCではインド製の大型灯油ストーブ2台を使用した。C1,C2では日本製、スウェーデン製の灯油ストーブ2台を使用した。特に支障になるようなことはなかった。C3ではガスストーブを使用した。ガスカートリッジはエーエージェントに頼み、用意してもらった。

灯油は50リットル用意し、使用前にフィルターでろ過してから使用した。BC,C1では水が取れたので十分な量だった。炊事用具は、ほぼ充分揃っていた。圧力鍋はC1で使用したが、有効だった。

[\[ページのトップへ\]](#)

4. その他の装備

梱包材にはすべてプラパールを使用した。ブルーシート袋(180cm×180cm)を作って持っていったが、大きすぎて用を成さなかった。梱包用のガムテープ、バンドストッパー、輪ゴム、ビニール袋等は現地では調達できないので、多めに持っていった。

今回、パルスオキシメーターを1台持参し、毎朝、動脈血酸素飽和度(SpO2)を測定した。高山病の症状の把握に有効だった。

リエゾンの装備については、IMFに\$700を支払い、借りることができた。

[\[ページのトップへ\]](#)

共同装備リスト

(登攀具)

No.	品名	規格	総数	備考
1	メインロープ	9mm×45、50m	3	
2	フィックスロープ	8mm 長さいろいろ	9	計760m
3	ミニロープ	8mm×15m	2	非常用
4	スリングロープ	6mm×1.5、2.5m	48	
5	アイス・ロックハーケン	各種	8	

6	スクリーハーケン		24	
7	スノーバー	スリング付き	8	
8	スノーアンカー	デッドマン	2	
9	ユマール		6	
10	ビーコン		4	
11	滑車		4	
12	カラビナ		61	
13	グラスポール	5mm × 1.5m	50	標識用 ピンテープ付
14	デポ旗	針金製	20	
15	高度計		3	
16	温度計		2	
17	無線機		2	IMFより借用
18	たこ		1	
19	部旗		1	

[\[ページのトップへ\]](#)

(露営具)

No.	品名	規格	総数	備考
1	B.C.テント	メス・キッチンテント	2	エージェントから借用
2	L.O.テント		1	IMFより借用
3	冬用テント	3、4人用	3	
4	スーパーツェルト		2	
5	テントペグ		74	
6	スコップ	ジュラルミン製	2	
7	スノーソー		2	
8	ノコ		2	
9	ラジオ		1	
10	ローソク	インド製	10	
11	ライター		10	
12	ブルーシート	2間 × 1.5間	2	
13	銀マット		1	水作成用

[\[ページのトップへ\]](#)

(炊事具)

No.	品名	規格	総数	備考
1	B.C.用ストーブ	灯油用、インド製	2	
2	上部用ストーブ	灯油用、日本・スウェーデン製	2	C1、C2用
3	B.C.用灯油		40l	
4	上部用灯油		10l	C1、C2用
5	ガスストーブ		1	C3用

6	ガスカートリッジ	450ml	2	エージェントから購入
7	灯油タンク	20L×2、10L×1	3	BC、C1用
8	SIGボトル(1L)	灯油用	2	
9	ポリタンク(1.5L)	灯油用	1	
10	メタ		12	
11	灯油ポンプ	ピコピコ	1	
12	ランタン	インド製	2	
13	コンロ台(ベニヤ板)	25×25cm	4	C1、C2用
14	テルモス	500ml	1	
15	コッヘルセット	各種	1セット	上部キャンプ用
16	水用ポリタンク	20L、16L用	2	
17	なべ		4	
18	圧力なべ		2	キャンプ1用
19	やかん		2	
20	ティーポット	大・小	2	
21	フライパン		2	
22	フライ返し		1	
23	チャパティセット	パン、のし棒	1	
24	ざる(プラ)		1	
25	ボール		1	
26	水バケツ		4	
27	包丁(ナイフ)		2	
28	タープシート		1	
29	プレート皿		5	
30	スプーン		5	
31	フォーク		6	
32	コップ		5	
33	おへら		5	
34	缶切り		3	
35	栓抜き		2	
36	皮むき		2	
37	たわし		1	
38	カナブラシ		1	
39	洗剤		2	
40	おたま		2	
41	茶こし		4	
42	粉ふる		3	
43	おろし金		2	
44	じょうご		1	
45	計量カップ・スプーン	各種	1	
46	コーヒーリップ・フィルター		1	灯油濾過用

47	ろ紙	各種	1	灯油濾過用
----	----	----	---	-------

[\[ページのトップへ\]](#)

(衛生)

No.	品名	規格	総数	備考
1	トレット [°] - [°] -		20	
2	石鹼		4	
3	薬品セット	体温計含む	2	
4	パルスオキシメーター		1	

[\[ページのトップへ\]](#)

(修理・予備品)

No.	品名	規格	総数	備考
1	アイゼン修理具	アイゼン(1)含む	2	
2	ロングスパッツ予備		1	
3	オーバーミトン予備		1	
4	BC用ストーブ修理具	インド製	1	
5	上部ストーブ修理具	替えヘッド [°] etc.	1	
6	圧力なべ予備品	ゴムの部品各種	2	重要
7	工具セット	カッターナイフ [°] 、 [°] 、 [°] 、針金	1	
8	リペアキット	接着剤、リペア [°]	1	
9	裁縫道具		2	
10	アルカリ電池	単三・無線用	50	インドで購入

[\[ページのトップへ\]](#)

(梱包)

No.	品名	規格	総数	備考
1	ガム布テープ		4	あればあるほど重宝する
2	ビニルテープ		2	
3	スズランテープ		2	
4	輪ゴム	100g/箱	4	
5	ビニール袋	各種	1	
6	ゴミ袋	黒色	10	C2での水作りに使用
7	バネばかり	20kg用	2	
8	プラパール	大・小	12	
9	バンドストッパー		2	プラパールの梱包に使用 便利
10	ブルーシート袋	1.8m x 1.8m	4	大きすぎた

[\[ページのトップへ\]](#)

(その他)

No.	品名	規格	総数	備考
1	通信・事務用品		1セット	
2	カメラ		7	
3	フィルム		70	
4	ビデオカメラ		1	
5	おみやげ	折り紙、紙風船、ノート等	1	現地の子供に
6	カード電卓		4	1人ひとつ 困ったときに

[\[ページのトップへ\]](#)

梱包リスト (小倉憲悟)

No.	品名	単重量 (g)	持出 数	持出重量 (g)	辺見(BOX1)		本多(BOX2)		小倉(BOX3)		野入(BOX4)	
1	メイン ロープ	2,200	1	2,200	1	2,200	-	-	-	-	-	-
2	ミニロー プ	750	2	1,500	-	-	1	750	-	-	1	750
3	スリング ロープ	60	48	2,880	12	720	12	720	12	720	12	720
4	ロック ハーケン	100	9	900	2	200	3	300	2	200	2	200
5	アイス ハーケン	100	24	2,400	6	600	6	600	6	600	6	600
6	スノーア ンカー	500	2	1,000	1	500	-	-	1	500	-	-
7	滑車	100	4	400	1	100	1	100	1	100	1	100
8	カラビナ	60	50	3,000	12	720	12	720	12	720	14	840
9	高度計	100	2	200	-	-	1	100	1	100	-	-
10	温度計	50	1	50	-	-	-	-	1	50	-	-
11	無線機	500	3	1,500	-	-	1	500	1	500	1	500
12	部旗	130	1	130	-	-	-	-	1	130	-	-
13	スプレー	450	1	450	-	-	-	-	-	-	1	450
14	たこ	600	1	600	-	-	-	-	1	600	-	-
15	冬用テン ト	2,300	2	4,600	-	-	1	2,300	-	-	1	2,300
16	スーパー ツェルト	500	2	1,000	1	500	1	500	-	-	-	-
17	スコップ	580	1	580	-	-	-	-	-	-	1	580
18	スノー ソー	260	2	520	1	260	-	-	-	-	1	260
19	ノコ	230	2	460	1	230	-	-	-	-	1	230
20	ラジオ	500	1	500	-	-	-	-	-	-	1	500
21	パルス計 測器	730	1	730	-	-	1	730	-	-	-	-
22	鼻腔拡張 器具	10	2	20	-	-	-	-	2	20	-	-
23	ガスス トープ	500	1	500	1	500	-	-	-	-	-	-

24	メタ	100	6	600	2	200	-	-	2	200	2	200
25	コッヘル セット	1,370	1	1,370	1	1,370	-	-	-	-	-	-
26	水用ポリ タンク	300	1	300	-	-	-	-	-	-	1	300
27	水作成銀 マット	560	1	560	-	-	1	560	-	-	-	-
28	水作成ゴ ミ袋	200	1	200	1	200	-	-	-	-	-	-
29	ライター	20	10	200	5	100	5	100	-	-	-	-
30	ろ紙(灯油 濾過用)	310	1	310	-	-	1	310	-	-	-	-
31	通信・事 務用品	2,052	1	2,052	1	2,052	-	-	-	-	-	-
32	おみやげ	2,000	1	2,000	-	-	1	2,000	-	-	-	-
33	薬品セッ ト	1,350	2	2,700	1	1,350	1	1,350	-	-	-	-
34	ストーブ 修理具	360	1	360	1	360	-	-	-	-	-	-
35	工具・リパ アセット	1,025	1	1,025	1	1,025	-	-	-	-	-	-
36	ロングス パツツ (予備)	50	1	50	-	-	-	-	-	-	1	50
37	裁縫道具	100	1	100	1	100	-	-	-	-	-	-
38	アルカリ 電池	25	60	1,500	30	750	30	750	-	-	-	-
39	フィルム	30	70	2,100	10	300	25	750	25	750	10	300
40	トラックマ ップ	50	3	150	3	150	-	-	-	-	-	-
41	ガム布 テープ	500	4	2,000	1	500	1	500	1	500	1	500
42	スズラン テープ	210	2	420	1	210	-	-	-	-	1	210
43	輪ゴム	125	4	500	1	125	1	125	1	125	1	125
44	ビニル袋	1,800	2	3,600	1	1,600	-	-	1	2,000	-	-
45	バネばか り	360	2	720	1	360	-	-	-	-	1	360
46	プラBox (小)	1,288	2	3,864	1	1,288	1	1,288	-	-	1	1,288
47	プラBox (大)	1,880	1	1,880	-	-	-	-	1	1,880	-	-
48	ブルー シート袋	930	4	3,720	1	930	1	930	1	930	1	930

49	バンドストア -	500	2	1,000	1	500	-	-	-	-	1	500
50	食糧C 1 セット	-	1	4,700	-	-	-	-	1	4,700	-	-
51	食糧C 2 セット	-	1	4,600	-	-	-	-	-	-	1	4,600
52	食糧C 3 セット	-	1	4,600	-	-	1	4,600	-	-	-	-
53	食糧予備 セット	-	1	5,000	-	-	-	-	1	5,000	-	-
54	食糧B C セット	-	1	3,000	-	-	-	-	-	-	1	3,000
-	-	-	-	81,301	-	20,000	-	20,583	-	20325	-	20,393

[[装備](#)]

Contents

1. [基本方針](#)
2. [実際の経過](#)
3. [総括](#)
4. [参考図書](#)

1. 基本方針

今回の登山隊は、医師が参加しない隊であることを踏まえたうえで、以下の項目を柱とし、隊員の健康管理を考えることにした。

a) 高山病対策

高山病に対するパーティの共通の認識を持つため、起こりうる高所での症状とその対処方法について、登山の医学1)、高所医学2)、高みをめざせ/高所への挑戦の物語3)を参考にまとめ各自に出発前に目を通してもらった。また実際の高度障害について、遠征経験のある医師から話を聞き、知識を深めるよう努めた。高山病の対処は、投薬ではなく、高度を下げることを基本とした。

高山病について医療担当がまとめた項目は、高度馴化についておよび急性登山病(やや高所)、高所肺水腫(高所)、高所脳浮腫、高所網膜出血(極めて高所)についてである。

また、高所での活動では平地以上に、体内の水分を必要とすることがわかっており、その対策として、行動中は各自水筒を携帯し、休憩の際など常に水分を補給するよう努めた。特に今回は、医師のアドバイスと大塚製薬の御協力により、速やかに体内に吸収されるスポーツドリンク「ポカリスエット」を多用し水分の補給に務めた。また高所での食事は、一般に塩分を控えることとされているが、これについては、各自の好みの問題もあり、特に意識して対策はとらなかった。

b) その他の病気の対策

考えられる病気について(特に下痢)、遠征経験のある医師と相談し、その症状と対処方法について教わった。

c) 事前の対策

遠征出発前に、各自精密検査を行った。また、予防接種はA型肝炎(乾燥ワクチン:チバ)、破傷風について行った。

d) 薬品、医療器具リストの作成と、梱包および使用法の検討

実際に登山隊に参加したことのある医師との共同作業で行った。尚実際に携行した薬品および医療器具のリストを表1に示した。これらの薬品、医療器具を2パック用意し、各々のパックをさらに、腹痛・下痢・胃腸薬、頭痛等高所関係、外傷関係の3つに分け、その場に応じて隊員が使用を誤ることのないよう配慮した。またさらに、個人で頻繁に使用すると考えられる下痢止め、虫刺され、外傷、高所での頭痛などの薬品は、上記の薬品パックとは別に個人用薬品

として人数分用意し各自が携行した。このリストは表2に示した。一方、今回ちょっとした試みとして、スポーツ選手らに用いられる鼻孔拡張テープを携行した。これは、鼻孔を広げることにより酸素吸入量をアップし運動能力を高める効果を期待したもので、今回の登山隊では高所において実際に使用しその効果を検討してみることにした。

e) 実際の隊員の健康管理

高所に入ってから、異常を事前に発見するため、健康チェックリストを作成し、各自が健康管理に努めるよう指導した。

・健康チェックリストの項目

体温、脈拍、呼吸数、尿・便回数、食欲の有無、睡眠、疲労（回復）、浮腫の有無。

また今回は、パルスオキシメーター：動脈血酸素飽和度測定装置（ミノルタ製PULSOX-5）を携行しSpO₂（動脈血中酸素飽和度）を随時測定し、各自の健康管理および高所順応に役立てる試みを行った。

[\[ページのトップへ\]](#)

2. 実際の経過

～ニューデリーからB.C.まで～

生水を禁止し、のどの渇きは、お茶やミネラルウォーターで補った。また外食の際は、生野菜等、火の通っていないものは自粛するよう心がけた。しかし、やはり風土の違う異国の地、気を付けてはいてもやはり多かれ少なかれ下痢の症状を訴える隊員はいた。ビオフェルミン、フェロベリンAを使用。この下痢はこの後も期間を通じて良くなったり再発したりの繰り返しであった。幸い高熱を伴う悪性の細菌による下痢と思われるものは発生しなかった。

また移動中、ロータン・パス（3978m）、バララチャ・ラ（4891m）、タグラン・ラ（5300m）といった標高の高い峠越えがあり、また途中滞在する町もマナリ（1830m）、ジスパ（3142m）、レー（3500m）と高所であり計画段階から高度障害に対する心配が指摘されていた。実際、この高所に伴う不調を訴える隊員がでた。以下にその経過を記す。

7月20日、マナリからロータンパスを越えジスパに入る。夕食時、小倉が食欲不振と頭痛を訴える。PLとセデスを投与、十分な水分補給をし休養するように指示する。その後小倉は回復し特に症状の悪化はみられなかった。

7月21日、レー到着、夕方、野入が頭痛を訴える。疲れもありPL、セデス投与。

7月22日、レー到着の次の日の朝、野入が不調で起きられず、PL、セデス投与し夕方回復。この日は、高所順応をかねた休養日で各自少し外を歩いて順応をしようという日であったが、回復後行動した野入は、かえってそれがオーバーワークになったかホテルに帰着後、再び頭痛を訴え寝込む。食欲もなく体力の消耗が危惧されたため、PL、セデスを投与し、とにかくお茶、フルーツジュース等飲み物で水分と栄養の補給をするよう指示した。次の日も野入は不調を訴え寝込んでいたがこのときパルスオキシメーターのSpO₂の値は50前後と低く、明らかに高度障害と思われた。

7月24日、レーからカルギルへの移動。この間は標高がどんどん低くなる移動

であるため野入の体調の回復が期待された。案の定、この移動中に彼の体調は回復し食欲も回復していった。

～登山期間中～

この登山期間中、7月28日から各自パルスオキシメーターにより脈拍数、SpO₂の値を記録してもらい体調管理に役立てることとした。測定は、最もそのときの体調を反映したデータが得られるとされる4)起床後まもない時間帯に、シュラフに入ったままの臥位の状態でいった。本期間中のこれらの値の推移を図1および図2に示した。この結果から脈拍数については、個人差はみられるものの、全体としてはB.C.休養時には少なく、高所滞在時には多くなる傾向がみられた。またSpO₂の値については、滞在する高度との関連がより顕著であった。すなわち高所滞在中はSpO₂の値は低くなり、B.C.に近づくとつれこの値は高くなった。

以上の結果をふまえ実際の行動の経過および気づいた点を以下に示す。

- 登山期間中多かれ少なかれ隊員は頭痛を訴えたが、この頭痛を抑えるのにセデスは非常に効果が高かった。
- 登山期間前半、本多は他の隊員よりSpO₂の値が低く、特に8月4日、それまでの荷上げルートワーク等で疲れもあり風邪気味であった。また8月5日、B.C.休養日1日目の朝は、顔がむくむ浮腫の症状が現れた。そのため利尿剤であるラシックスを投与した。その後、休養期間中に直ちにこの症状は改善され、それと平行するようにSpO₂の値は上昇していている。このことからこのSpO₂の値は、高所順応の程度や体調を非常に良く反映していたと思われる。一方、幸いにして他の隊員については、対処を必要とされるような重度の高度障害は期間を通じてみられなかった。
- また、全体的にみると、C2建設後のB.C.での休養を境に、全体員にSpO₂の上昇がみられ、一方C3建設とC3入り、つまり6000mを境に再びSpO₂の低下がみられた。またアタック成功後下山に伴いSpO₂の値は上昇し、最終的にB.C.に着いた時点での値はおよそ一ヶ月前B.C.入りした時に比べSpO₂の値は全ての隊員において高くなった。このことからこのSpO₂の値は、滞在した標高と顕著な関連をもち、またB.C.入りした日よりB.C.に帰ってきたときのSpO₂の値が高いことから、その高所への順応を如実に反映しているものと思われた。
- また、鼻孔拡張テープについては、数人の隊員が行動中に使用してみたが、慣れないためか装着していると非常にうっとうしく、汗をかくことによりいつのまにかはがれてなくなっていた。そのため高所順応あるいは高所での行動への効果は把握できなかった。

～下山から帰国まで～

登山活動中、特に大きな怪我もなく、全員無事に下山した。

下山後は、全員登頂の喜びからか、立ち寄った町々で暴飲暴食をしたため、食べ過ぎによる腹痛をおこすものが目立った。症状がひどい場合には前出の薬の他にロペミンも投与した。

特に野入は、下山後の移動中にも不調を訴えることが多く、何度か嘔吐していた。長い遠征での緊張や疲れもあったのであろう。幸いここでも高熱を伴って長期にわたり苦しむ悪性の細菌による下痢はみられなかった。

[\[ページのトップへ\]](#)

3.総括

1) 健康管理について

インド入国後、隊員全員が、下痢をした。これは日本との食生活の違い、あるいは良く言われることだが、水の違いで、ある程度は避けようがないと考えられる(いくら生物、生水を口にしないとしても)。ただこの症状が、悪化したり長期化すると、やはり消耗であり、それを軽減するために、薬品は必携であろう。一方、細菌性の下痢や病気は、かかるとやっかいであり、そのためには今回行ったような、事前の予防接種や、細心の注意は必要であろう。

2) 高所での体調管理について

また、高所での健康管理は、実際悪くなったら高度を下げるのが、一番の薬である。ただ非常に難しいのは、順化するペースが、隊員各自異なり、また経験がないとなかなか自分自身の体調も把握しにくいことではないかと考えられた。

今回の遠征では、比較的早い段階(デリーからB.C.への移動中)で、小倉、野入の二人はそれぞれ高度障害と思われる症状を訴えた。その後、B.C.入りして登山期間中は、本多が浮腫の症状がみられたぐらいで、隊全体としては大きく登山計画を遅らせるような高度障害はみられなかった。今回、本遠征が登頂までスムーズに計画が遂行されていった背景には、こうした早い段階での高度障害の発現と、移動中の低所から高所そしてまた低所といった峠越えのアプローチにより、各人の高度順化がB.C.に入るまである程度行われていったことがあると考えられる。

また、高度障害に伴う頭痛あるいは浮腫に対する薬品での対処については、それぞれ効果がみられる薬品があり、医師のアドバイスを受けた上で適切な使用をしていくことは高所へ遠征する上で重要であると思われた。高度障害の予防薬はなく、もちろん順化が一番であることは間違いがなく、効果があるとされているアセタゾラミド、ラシックスといった利尿剤は今回のように補助的に用いるのが良いと思われる(長期使用による副作用や薬効の個人差の判断の難しさから)。実際、本多は長期の浮腫に対して一度服用したが、服用後の効果はきわめて良好であった。

今回、実際に携行しその活用を試みたパルスオキシメーターは、前述の通り、そのときの体調や高所順応の程度を知る良い手がかりとなり、遠征に際して大きな効果を発揮するものと思われた。ただ高所では、パーティが別々のテントに寝泊まりする事がありパーティに1つしかない場合、起床後の受け渡し等の煩雑さを伴うため、今後より小型軽量で(今回携行したのは0.67kg) 価格的にも手に入りやすいパルスオキシメーターが開発され、将来は1人1人の個人装備となることが望ましいと考えられた。

また実際各個人のこのパルスオキシメーターによるSpO₂の値の変化について、山本、神尾らは、個人内の体調変化を捉えることには有効だが、個人間の体調の優劣を捉えることができるかどうかについては明確ではないと指摘している(5)。このことに関して、今回の遠征では確かに前者の個人内ではその体調変化が把握できるものの、個人間に対してはやはり隊員ごとに個人差があり、この差異をどう評価するかは、まだまだ検討の余地があると思われた。ただ、本遠征隊の隊員1人1人の、この高所での経験は、またさらなる遠征を行う際、なんらかの検討材料となることを期待したい。

最後に鼻孔拡張テープについてだが、これは前述の通り実際の使用にあたり

問題点が多く、事前の計画段階で、装着の不快感やその使い勝手について、実際に使用してみるなどの検討がまず必要であったであろう。また、事前の検討をしっかりと行った上で、実際高所での使用の効果を検討し、睡眠中の使用なども含めて、その効果についての実際のデータを蓄積していくことが今後の課題となる。

3)遠征に持参した薬品およびその使用、梱包について

個々の持参した薬品のおおよその使用量と使用して気づいた点などを、表1および表2に付記した。このように今回の登山では、腹痛下痢関係と高所での頭痛薬を多く使用した。幸い外傷に関しては、靴擦れと軽い擦り傷程度であった。

今回の薬品は表の内容で1パック1.25kgであったが、その必要量については、有事の際を考えるとこのくらいあってもいいのではないだろうか。

[\[ページのトップへ\]](#)

4. 参考図書

1. 登山の医学 J.A. ウィルカーソン
 2. 高所医学 マイケル・ウォード
 3. 高みをめざせ/高所への挑戦の物語 チャールズ・S・ハウストン（岩と雪連載）
 4. 第6回北海道海外登山研究会参考資料 北海道海外登山研究会
 5. カンチェンジュンガ無酸素登山報告書 ガイア・アルパインクラブ
-

食料報告 (辺見悟)

Contents

1. [基本方針](#)
2. [実際の内容](#)
3. [梱包について](#)
4. [全体を通じて](#)
5. [国内購入品リスト](#)
6. [国外購入品リスト](#)

1. 基本方針

- 可能なかぎりインド国内で調達する。
- C1(4,620m)での食事は現地調達品を主体とする。
- 食料計画は、BC食, C1食, 高地(C2,C3)食, 行動食の4つに大別する。
- 登山をする際には、成人一人当たり3,500kcal/日が必要とされるが、高地(C2,C3)食の栄養不足はC 1以下で補う。
- 水分は3ℓ/人日を摂取できるように、行動中に各自水筒(1ℓ)を携帯する。
- 予想されるビタミン不足は、ビタミン剤によって補う。

[\[ページのトップへ\]](#)

2. 実際の内容

1) BC食について

日本から持ち込んだ若干の嗜好品以外は全て現地調達し、コックに調理を一任した。インディカ米を主体とした食事で、飽きることはなかった。

2) C 1 (4,620m)食について

主食はインディカ米を考えていたが、普段食べ慣れている短種米がデリーで手に入った。米は200g/人回と計算したがちょうどよい量だった。米は圧力鍋でうまく炊くことができた。また翌日に出発するときの時間節約のため、晩飯時に朝の分まで炊いた。

おかずについては、現地で手に入る食材の不確かさから、計画段階ではこれといって決めず、缶詰・野菜の消費重量を大まかに設定するにとどめた。缶詰は肉・魚100g/人回、フルーツ50g/人回、野菜は100g/人回とし、食べ飽きないように各種を揃えた。調味料についても手に入るだけの種類をデリーで購入した。これで食材は豊かになったが、発想の貧困さからか、晩飯は野菜炒めかシチュー、朝食はみそ汁雑炊に落ち着いた。

また、日本からフリーズドライ食品（ジフィーズ すき焼き、乾燥スープ等）を若干持参することにより、現地調達品不足時、おかず製作失敗時のフォローを図った。

高地食（C2,C3食）について

主食は、朝食にインスタントラーメン(120g/人回)、晩飯にジフィーズ(1袋,120g/人回)とした。高度に順応した後半には、量的に満足できない者も出てきた。これらのインスタント食品は高度下においても、十分満足できるものだった。

お茶は1日5回（朝2 行動中1 晩2）で、内訳は紅茶2、ポカリスエット1、ほうじ茶1、味噌汁1とした。

3) 行動食について

ビスケット(120g/人回)、チョコレート(15g/人回)、あめ(20g/人回)、ナッツ(40g/人回)とした。量的にはこの程度でよいが、乾燥地域であれば、あめを多くしたほうがよい。行動食はBC、C1にある菓子類の中から各自必要分をパッキングし、荷上げした。

[\[ページのトップへ\]](#)

3. 梱包について

（国内から持ち込む食糧についてのみ）

BC食：調味料、嗜好品等を1セット作成した。

C1食：フリーズドライ食品、調味料、嗜好品を1セット作成した。

高地食：4人パーティ×3日分の主食、お茶セット、調味料等を1斗袋にパッキングした。これを予備食も含め3セット作成し、C2に2セット、C3に1セット配置した。

[\[ページのトップへ\]](#)

4. 全体を通じて

- 購入経路について：一部の嗜好品をのぞくすべての食料は、レーで購入可能である。ニューデリーで購入する必要はなかった。生鮮食料品はカルギルで購入した。
- BCでの食事について：エージェントを介してコックを雇うのであれば、コックは大抵食料リストを持っている。日本であれやこれや考えずに、経験のある彼に任せようがよい。
- リエゾンオフィサーの登山活動参加について：計画段階でリエゾンオフィサーはBCどまりとして考え、C2、C3の高地食はすべて4人分でパッキングし、日本から持ち込んだ。しかし今回、登山活動にリエゾンオフィサーが加わった為、あと少し登山期間が延びれば高地食が足りなくなるところだった。ポーターの力を借りて各種の缶詰、調味料、副食、飲料、野菜等をC1に荷上げできた訳だが、リエゾンオフィサーの登山活動への参加、登山期間が延滞したときのBC～C1間の長さ等を考えると、C1の食料は何かと融通が利き、心理的に安心できる結果になった。小人数パーティの場合は、画一的な食料計画を立てるのではなく、各自の嗜好を最大限反映させるべきだと思う。

国外購入品リスト

品名	単重(g)	個数	総量(g)	C1荷上量	備考	購入地	
主食	インディカ米	-	-	40,000	1,000	30Rs/1kg Basmati	LH
	Atta (小麦粉)	-	-	15,000	-	12Rs/1kg	LH
	Maida (小麦粉)	-	-	10,000	-	13Rs/1kg	LH
	短種米	-	-	7,500	7,500	魚津産こしひかりを発見	ND
副食	ヌードル	400	12	4,800	-	18Rs/1package(400g)	LH
	インスタントラーメン	108	24	2,592	-	7Rs/1package(108g) Maggi	LH
	コーンフレーク	500	7	3,500	-	80Rs/1箱(450g)	ND,LH
	ホットケーキの素	900	2	1,800	1,800	-	ND
行動食	ビスケット各種	-	-	12,000	5,000	100Rs/1kg	LH
	チョコレート	40	150	6,000	2,200	10Rs/1個(40g) Nestle	LH
	あめ	-	-	2,000	1,500	-	LH
	カシューナッツ	-	-	1,000	-	450Rs/1kg	LH
	アーモンド	-	-	1,500	1,500	450Rs/1kg	LH
	ピーナッツ	-	-	1,000	-	60Rs/1kg	LH
	レーズン	-	-	500	-	300Rs/1kg	LH
お茶	紅茶	-	-	1,500	-	-	LH
	紅茶(ティパック)	2	100	200	200	高地食用	ND
	砂糖	-	-	20,000	4,000	22Rs/1kg	LH
	パウダーミルク	500	8	4,000	1,000	67Rs/1package(500g)	ND,LH
	コーヒー	250	4	1,000	-	60Rs/1瓶(250g)	LH
	中国茶(ジャスミンティ)	100	2	200	200	-	ND
鮮食料品	じゃがいも	-	-	30,000	4,000	10Rs/kg	KG
	にんじん	-	-	4,000	5,600	15Rs/kg	KG
	玉ねぎ	-	-	15,000	-	30Rs/kg	KG
	にんにく	-	-	1,000	-	50Rs/kg	KG
	しょうが	-	-	1,000	-	50Rs/kg	KG
	キャベツ	-	-	8,000	-	10Rs/kg	KG
	カリフラワー	-	-	10,000	-	20Rs/kg	KG
	トマト	-	-	15,000	-	20Rs/kg	KG
	豆	-	-	5,000	-	20Rs/kg	KG
	ライム	-	-	2,000	-	40Rs/kg	KG

	マンゴ	-	-	2,000	-	30Rs/kg	KG
	りんご	-	-	10,000	-	20Rs/kg	KG
	鶏	-	15羽	16,300	-	95Rs/kg	KG
	卵	-	450	9,000	-	2.5Rs/ 1 個(20g)	KG
缶詰	肉・魚各種		25	9,850	7,900	-	ND,LH
	フルーツ各種		20	16,800	5,400	-	ND,LH
	その他	-	41	19,616	3,500	チーズ,コン,豆,マッシュルーム,タケノコ他	ND,LH
調味料	醤油	-	1	1,000	50	日本製	ND
	オスターソース	-	1	500	-	-	ND
	トマトソース	500	3	1,500	300	日本製(1) , 40Rs/1瓶(500g)	ND,LH
	マヨネーズ	500	2	1,000	500	日本製(1)	ND,LH
	ガーリックソース	-	1	300	300	-	ND
	チリソース	-	1	300	-	-	ND
	ごま油	-	1	500	-	-	ND
	マスタード	-	1	200	-	-	ND
	スープの素(2種類)	100,50	30	1,800	-	19Rs/1箱(50g),14Rs/1個(100g)	LH
	味の素		36	1,000	-	トータルRs324 9Rs/1箱	LH
	チリペッパー	-	1	1,500	50	-	LH
	マサラ	50	25	1,250	50	12Rs/1箱(50g)	LH
	ココナツパウダ-	-	-	1,000	-	150Rs/1kg	LH
	Elachi (香辛料)	500	1	500	-	Total400Rs	LH
	ブラックペッパー	50	6	300	50	23Rs/1箱(50g)	LH
	塩	-	-	5,000	500	-	LH
	テーブル コショウ	50	1	50	-	20Rs/1個(50g)	LH
テーブル 塩	100	1	100	-	20Rs/1個(100g)	LH	
その他	蜂蜜 (ビン)	500	3	1,500	500	-	ND
	ジャム (ビン)	500	3	1,500	450	-	ND
	バター	500	12	6,000	1,000	59Rs/1個(500g)	LH
	ラム酒	750	2	1,500	-	140Rs/1瓶(750g)	LH
	食用油	-	-	16,000	-	56Rs/1リットル	LH
	ダル (上質)	-	-	6,000	-	35Rs/1リットル	LH
	ダル	-	-	2,000	-	20Rs/1リットル	LH
総計	-	-	362,958	56,050	-		

[\[ページのトップへ\]](#)

渉外報告 (辺見 悟)

Contents

- [概要と経緯](#)
- [登山許可取得まで](#)
- [エージェント](#)
- [トランシーバーについて](#)
- [航空チケット](#)
- [ビザ](#)
- [輸送](#)
- [保険](#)
- [リエゾンの装備](#)
- [緊急時の対策](#)
- [連絡先](#)

概要

インドヒマラヤにおける登山隊の渉外活動については、「インドヒマラヤの手引き」(H A J 発行)や毎年開かれているインドヒマラヤ会議(H A J 主催)の資料等が詳しく、大いに参考になった。インドヒマラヤに行く登山隊を取り巻く環境は年々変化しており、各登山隊の渉外係は現在の環境の詳細を正確に把握すべきである。そこで渉外活動全般の詳細は、上記の書籍、資料等に譲り、ここでは私たちの渉外活動を反省を込めて振り返ってみたい。

経緯

- 96 11.20 I M F (インド登山財団) に D O D A を登りたい旨の F A X を送る
- 11.27 仮アプリケーション提出 (I M F に着いたのは 12/27)
- 12.18 額面 U S 1,690 ドルの銀行手形 (Bank Draft) を I M F に送付
- 97 01.15 I M F より、正式申請に必要な各種書類の提出要請、環境寄付金及び環境保護費徴収の手紙が届く
- 02.05 不足分の額面 U S 1,610 ドルの銀行手形を I M F に送付
- 14 正式申請書の提出
- 27 インド大使館にビザ申請
- 03.31 新たに加わった隊員 (1 名) のビザ申請
- エージェント (I B E X E X P E D I T I O N S) とコンタクト開始
- 04.15 I M F に入国通知状の送付
- I M F から正式登山許可が下りる
- 06.10 全隊員のビザ交付
- 07.10 先発隊出国
- 17 後発隊出国

[\[ページのトップへ\]](#)

登山許可取得まで

私たちは、11月20日、キシウトワールヒマラヤ・ドーダ峰に遠征したい旨の F A X をインド登山財団 (I M F) に送り、後日、I M F からドーダ峰を予約 (Booking) したとの手紙を受け取った。また、F A X と同時に、隊員数や遠征期間等が未定の申請書を送付したが、仮申請においては不必要と思われる。12月18日、登山料 (Booking Fee) として額面1,690ドルの銀行手形 (Bank Draft) を I M F に送付した。その後、1月15日付の I M F からの手紙で、登山料が増額されたこと、環境寄付金 (Environmental Levy, \$ 300 : Non-Refundable) 1) 及び環境保護の為にデポジット (Environmental Security Deposits, \$ 1,000 : Refundable) 2) の存在を知った。早速、不足分の \$ 1,690 を I M F に送付するはめになった。この他、この手紙により正式登山申請に際して以下の書類が必要になった。

1. 申請書のコピー (1 部) (I M F の形式に則ったもの)
2. パスポートサイズの写真を添付した各隊員の Bio-data のコピー (8 部)
3. 遠征予定表 (8 部) (日割りのもの)
4. ルート図 (8 部) (手書きや写真ではなく、地形図上にマークしたもの)

2月14日、上記の書類を I M F に送付した。これで登山申請は終了した。

手紙による I M F との交渉は日本から出した手紙が一ヶ月後に I M F に着くなど、時間がかかり非効率である。多少お金を払ってでも、F A X や e-mail を使って素早くやり取りのできるエージェントを介して交渉した方がなにごともうまく行くと思う。

注 1) 「現在実施中の 1 隊につき千ドルのデポジットは不要となる。」

注 2) 「 1 隊につき 3 百ドルの環境税を 4 百ドルに変更する。」

(第19回インド・ヒマラヤ会議資料 p 3 ./1998/日本ヒマラヤ協会)

[\[ページのトップへ\]](#)

エージェント

今回、1984年スダルシャン・パルバート峰遠征隊と同じく IBEX EXPEDITIONS に依頼することにした。契約内容は、以下の通り。

1. デリーの空港からホテルへの隊員の送迎と隊荷の輸送
2. デリーのホテルの確保
3. I M F とのブリーフィングの日時決め
4. デリーにおける買い物の手伝い
5. デリーからマナリまでの輸送手段の確保
6. コックの確保
7. メステント、キッチンテント、トイレットテントの借用
8. フィックスロープ (400m , \$ 200)、E P I ガスカートリッジ (4 本、\$ 36) の購入
9. 有事の際の一時的な資金の提供
10. キッチンボーイの雇用
11. デリーのホテルの確保

12. デリーの長距離バスターミナルからホテルへの隊員の送迎と隊荷の輸送

1～7の契約については、一人あたり\$690、隊員4人で\$2,760であった。送金は手数料\$25を含め、IBEXの銀行口座に振り込んだ。9の契約には、各隊員の保険の明細のコピーを提出したが、結果的には口約束に終わった。レーにおいて、IBEXの子会社とも言えるHIMALAYA EXPLORERSでキッチンボーイを雇うことにした。

また、登山活動終了後、デリー帰着の際に、マナリよりFAXで以下の内容をIBEXに依頼した。11、12の契約については、RS8,580であった。

インドには登山関係のエージェントは、他に数多くあるが、IBEXは、かなり手際良く、信頼できる仕事をしてくれる。

[\[ページのトップへ\]](#)

トランシバーについて

IMFより、2台借用することとした。借用料は、一台一ヶ月あたりUS50ドル、超過料金は一台一週間ごとにUS12ドルである。その他、保証金が必要であり、一台につきUS450ドルである。この保証金は遠征終了後点検され、故障がなければ、IMFより返却される。

当初、私たちはIMFに輸入、開局申請書を送付し、許可を得てから日本より持ち込む通常のプロセスを踏む予定であった。インド国内において登山隊が使用しうるトランシバーの周波数は150.175,150.900MHZ（及び26.968,26.976MHZ）であり、日本国内で私たちが普段使用しているトランシバーの周波数は144MHZである。だが、最近のトランシバーは周波数の拡張が簡単にはできない。税関の目を盗みインドにこっそり持ち込むことも考えたが、エージェントの薦めもあって、最終的にIMFから借用することにした。

IMFには数は不明だが、数隊の登山隊が使用しうる規模のトランシバーがある。すべて日本製の同一機種であり、つい最近購入したらしかった。日本の単三電池が使用可能であった。

[\[ページのトップへ\]](#)

航空チケット

今回のインドへの渡航には、エア・インディアの成田 デリー直行便往復、90日のオープンチケットを利用した。夏休み期間中の学生割引を利用した。

[\[ページのトップへ\]](#)

ビザ

現在、インド国内で登山活動をするためには、Tourist Visaとは異なるX Mountaineering Visaが必要である。通常、申請してから交付されるまで3～4ヵ月かかり、出発予定日から逆算し余裕をもって申請するのが望ましい。過去の報告書にはビザがなかなか交付されずに苦労した遠征隊があったので、我々はビザに関して大変神経を使った。

今回の遠征隊員のうち一人は、IMFへの正式なアプリケーションのメンバーズリスト送封（2月14日）後、遠征隊に加った。早急に彼のみのBio-dataを

IMFにFAXで送り（同時に送封もした）、インド大使館へビザ申請をおこなった。その際、インド大使館に申請が遅れた理由を書いた派遣母体長と隊長連名の保証書（Certificate）を提出する必要があった（通常は派遣母体長の保証書のみ）。結果、彼以外の隊員は2月27日に、彼は3月31日に90日ビザをインド大使館に申請し、全員6月10日付で交付された。

また、出発の1ヶ月ほど前に別の一人の隊員が遠征参加を取りやめたが、このことによる障害は皆無だった。

ビザ申請日が延滞する原因の一つに、隊員がパスポートの取得や書き換えを前もって済ませていないことが挙げられる。申請時に登山隊隊員すべてのパスポートを同時に出す必要があるからである。今回、比較的短期間でビザが取得できたことは幸運であった。

[\[ページのトップへ\]](#)

輸送

今回、日本からインドへ持ち込む隊荷は、旅行者手荷物別送品（アナカン、Unaccompanied Baggage）を使用せず、全て手荷物にした。隊員一人、機内預かりにするプラパール（20kg）と個人装備のザック（20kgまで）を持ち込んだ。エア・インディアの搭乗手続きでは荷物のオーバーチャージを取られないように、計画段階から充分配慮したつもりであったが、国内線の千歳～羽田と帰路のデリー～成田、羽田～千歳で多少のエクセス分（超過重量料金）を取られた。

[\[ページのトップへ\]](#)

保険

東京海上火災保険代理店の山谷氏を通じて保険契約を行った。期間二ヶ月で以下の内容。一人当たり¥37,950であった。

死亡・後遺障害	100万円
傷害治療	100万円
疫病	100万円
救援費	500万円
携行品	7 - 30万円

IMFは、有事の際のヘリコプターを始めとする救援隊や捜索隊の出動費用を賄うための保険加入を各登山隊に対して要請している。

[\[ページのトップへ\]](#)

リエゾンオフィサー

リエゾンオフィサーの装備はすべてIMFより借用した。借用料はUS700ドルであった。IMFには装備の倉庫があり、種類、数量は豊富にある。しかし、支給される装備はほとんど一世代は前のもので、これではリエゾンオフィサーはBCに留まるしか無いのでは、と思われる程であった。自分の登山技術を向上させようと思っている今回の様なリエゾンオフィサーには、中古品で良いから日本の装備を支給したほうが良かった。

緊急時の対策

前年にインドヒマラヤで登山をしたある登山隊より、ニューデリーに支局を持つある会社を紹介していただき、緊急時の事務局への連絡手段としてFAXを使わせていただけるようお願いした。事故が起こった場合登山隊とは全く関係のない方々に迷惑をかける訳で、恐縮であったが、幸い快諾して頂いた。出国前に日本大使館及び外務省外務大臣官房文化交流部文化第二課に登山届を提出し、遠征中には日本大使館の石川達雄一等書記官に入下山連絡をした。また、日本より英文の緊急連絡網を持参し、遠征地域の要人に手渡した。

各隊員は家族の了解を得て、念書・同意書・委任状の3通を本登山隊事務局長に提出した。

連絡先

インド国内

- Ibex Expeditions G-66, East of Kailash, New Delhi-110, 065.
TEL 91-11-632641, 91-11-6828479
Fax 011-6846403 e-mail : mandip.ibex@access.net.in
- インド登山財団 Indian Mountaineering Foundation
Benito Juarez Road, Anand Niketan, New-Delhi-110021, India
TEL 91-11-671211, 91-11-602245 Fax 91-11-6883412
- 日本大使館 Embassy of Japan
Plot No.4 & 50G Chanakyapuri, 12 Pretoyia Street, New Delhi, India
Tel 91-11-604071

国内

- 外務省外務大臣官房文化交流部文化第二課
100 東京都千代田区霞が関 2-2-1
TEL 03-3580-3311
- インド大使館
102 東京都千代田区九段南 2-2-11
TEL 03-3234-2391 Fax 03-3234-4866
- ツアープラザ・ノマド TEL 011-261-2039
- 山谷保険事務所 TEL 011-521-4281

会計報告 (小倉憲悟)

収入

隊員負担金	1,629,963
山の会会員寄付金	1,143,540
計	2,773,503

支出

(国内)

渡航費	481,550
輸送費	43,965
装備費	53,453
食料費	5,396
保険料	151,800
登山料	298,868
代理店経費	349,149
ビザ収得料	20,000
事務通信費・諸経費	221,950
計	1,626,131

(国外)

装備費	20,375	(Rs 6,095)
リエゾン装備費	81,900	(\$ 700)
食料費	105,023	(\$ 360 + Rs18,817)
交通・輸送費	177,225	(Rs 53,016)
ポーター雇用費	18,553	(Rs 5,550)
キッチンボーイ雇用費	25,690	(Rs 7,685)
宿泊・飲食費	150,887	(Rs 45,137)
事務通信費	55,224	(Rs 16,520)
代理店経費	28,682	(Rs 8,580)
雑費	59,623	(R 17,836)
計	723,182	(\$ 1,060 + Rs179,236)

支出総計	2,349,313	US1dollar=117 Rs35=117
------	-----------	---------------------------

残金

7424,190



気象報告 (野入善史)

Contents

- [1. 観測方法](#)
- [2. 気温](#)
- [3. 風](#)
- [4. 天気変化](#)
- [5. 降水量](#)
- [6. 日射](#)
- [7. 気象データ](#)

1. 観測方法

私達がどのような気象条件下で登山活動を行ったのかを振り返ってみた。今後、この山域で登山活動をする際の参考になれば幸いである。観測項目と測定法は次の通りである。

1)	天気 雲量	目視により観測した。
2)	気温	テムポ雪温計(スチール入り)により測定。BCではテントの本体の入口に外張りから吊るすように設置した。風通しはよかったが日中、日差しが強く風の弱い時には、実際よりもやや高い気温を示した可能性がある。
3)	風向 風力	風上に向かって立ち、コンパスの針の指す方角を風向とした。16方位で示した。風力は風速計がなかったので体感で判断した。したがって風力値は天気図で使用されているものとは異なるので注意して頂きたい。目安として風力0(無風)、1(肌にやっと風を感じる)、2(デポ旗がゆれる)、3(デポ旗がパタパタとゆれる)、4(風で砂が舞う)、5(気温が低いとシビアかな)。
4)	気圧変化	アナログ式高度計から高度の数値変化を読み取り気圧変化とみなした。高度が上がれば気圧が上昇したことを意味し天気は良くなる。逆に高度が下がれば気圧が下降したことを意味し天気は悪くなる。高度計はアナログ式を2個、デジタル式を1個携行したが、それぞれの示す高度には誤差があった。最大で約100mの誤差が生じたが、気圧変化を知るだけならどれか1つの高度計高度を記録するだけでよいと考えた。

[\[ページのトップへ\]](#)

2 . 気温

BCでは表1から分かるように気温の日較差が大きい。日中は20℃を超え、暖かくて日差しが強い。日が沈んで日陰になると急に気温が下がり寒くなる。夜は0℃前後まで冷え込みセーターを着ないと寒いくらいである。C1、C2では表2、3のように日中はプラスの気温で行動中に寒いと感じることはなかった。日中は氷河上に水が流れているが、夜間には凍ってしまう。氷河上でキャンプする場合は水を作るための燃料を節約するために、日中の流水を飲料用に貯えておくといよい。C3より上部では表4のように行動中でもマイナスの気温になることが多い。マイナス10℃以下になることもあるが、北海道の冬山の備えがあれば十分に合うだろう。

[\[ページのトップへ\]](#)

3 . 風

登山期間中は、概ね風は弱くて行動に支障をきたすようなことはなかった。風でふらついたり、耐風姿勢をとるということは全くなかった。ただし、海拔0mと比較すると高度6000mでは空気密度がほぼ半分になり、風速が同じでも風圧は地上の約半分になることを考慮する必要がある。つまり、風速が大きくても風力はさほど大きくはならないのである。風向は氷河の上部から吹き降ろすように南から北に向かってほぼ定常的に吹いていた。

[\[ページのトップへ\]](#)

4 . 天気変化

キシトワールヒマラヤは、乾燥地域とモンスーン気候との遷移域に当たる。過去の登山隊の報告書などから、この時期の天候はおおむね好天であることを予想していた。C1とC2では雪のために停滞する等天候不順の日もあったとうやら10日に一度くらいの周期で天気が崩れるみたいだ。BCで休養している時は不思議と天気がよかった。

天気変化は天気図が得られないので、観天望気と高度計の高度変化を気圧変化とみなして予測するしかなかった。実際には天気の崩れを予測するのは難しかった。特に、ピークアタック当日の天気の崩れは全く予想していなかった。

[\[ページのトップへ\]](#)

5. 降水量

C 1、C 2での降雪はいずれも5～10cmで量的には少ない。雷鳴を伴って一時的に強く降ることもあった。

[\[ページのトップへ\]](#)

6. 日射

晴れている時の日射は相当強いと思う。サングラスは必需品だ。ポーターの中にはサングラスをつけていない者もいた。C 1に荷物を入れるために建ててあったテントの周りの氷河は、2週間後に撤収する時には日射のために50cmぐらい融けてしまって、テントの部分だけ台地状に残っていた。

[\[ページのトップへ\]](#)

7. 気象データ

記号

Blue Sky	(Cloud 0-2)	b ;	快晴
Finebut Cloudy	(Cloud 3-7)	b c ;	晴れ
Cloudy	(Cloud 8-10)	c ;	曇り
Rain	(Cloud 10)	r ;	雨
Snow	(Cloud 10)	s ;	雪
Fog	(Cloud 10)/TD>	f :	霧

表1 BCでの気象

日 時	-	天気	雲量	気温 ()	風向	風力	高度計高度 (m)
7月28日	6:00	b	0	8.7	NW	3	-
-	7:00	b	0	12.9	NW	3	-
29日	9:00	c	10	11.8	NW	3	-
-	10:00	c	10	12.5	NW	2	-
-	11:00	c	10	13.5	E	1	-
-	12:00	c	10	15.9	NW	3	-
-	13:00	c	10	18.1	S	2	-
-	14:00	c	10	18.9	-	0	4272
-	15:00	c	10	19.5	WNW	1	4278
-	16:00	c	10	15.8	NW	1	4282
-	17:00	c	8	14.8	SE	1	4285
-	18:00	f b	6	14.0	NW	3	4292

-	19:00	f b	6	11.3	NW	3	4290
-	20:00	f b	5	7.9	-	0	4288
-	21:00	f b	4	6.8	-	0	4278
30日	5:00	r	10	5.8	NW	3	4290
-	6:00	r	10	5.8	NW	3	4295
-	7:00	c	9	6.8	NW	3	4282
-	8:00	f b	6	10.8	NW	3	-
8月 5日	10:00	b	0	18.4	S	3	4264
-	11:00	b	0	18.0	S	3	4258
-	12:00	b	0	17.5	S	4	4258
-	13:00	b	0	17.7	S	4	4256
-	14:00	b	1	17.5	S	4	4264
-	15:00	b	1	17.5	S	4	4264
-	16:00	b	1	16.8	S	4	4264
-	17:00	b	1	13.8	S	3	4264
-	18:00	b	2	10.7	S	2	4274
-	19:00	f b	6	7.2	S	3	4274
-	20:00	f b	7	5.7	NE	1	4274
-	21:00	f b	7	7.5	NNW	3	-
6日	9:00	f b	6	12.8	NW	4	-
-	10:00	f b	3	24.3	S	1	4256
-	12:00	f b	3	20.9	S	3	4248
-	13:00	b	2	20.8	S	4	4238
-	14:00	b	2	20.4	S	4	4242
-	15:00	f b	3	13.5	S	4	4248
-	16:00	b	2	11.7	S	3	4250
-	17:00	b	1	14.4	S	2	4248
-	18:00	b	0	12.2	S	1	4248
-	19:00	b	0	8.1	-	0	4256
-	20:00	b	0	7.7	NNW	3	4246
7日	7:00	b	-	12.2	NNW	3	-
-	8:00	b	-	16.3	NNW	2	-
17日	8:00	b	0	16.4	SSE	5	-
-	9:00	b	0	18.6	SSE	4	-
-	10:00	b	0	24.6	-	0	4208
-	11:00	b	0	24.7	S	1	4208
-	13:00	b	0	24.3	S	2	4228
-	14:00	b	1	23.6	S	2	4230
-	17:00	b	1	22.0	S	2	4246
-	20:00	b	0	11.5	SSE	3	4234
-	0:00	b	0	6.6	SSE	3	4240

18日	7:00	b	0	8.0	SSE	4	4226
-----	------	---	---	-----	-----	---	------

[\[ページのトップへ\]](#)

表2 C1での気象

日 時	-	天気	雲量	気温 ()	風向	風力	高度計高度 (m)
7月31日	6:00	fb	5	1.9	SW	2	4684
-	7:00	b	2	1.9	SSW	2	4688
-	8:00	b	1	5.8	SSW	2	4678
8月 1日	7:00	r	9	1.8	-	0	4700
-	8:00	r	9	4.7	SW	3	4700
-	9:00	s	10	4.6	SSW	3	4694
-	10:00	c	9	8.6	SSW	3	4690
-	11:00	c	9	8.5	SSW	4	-
-	12:00	fb	7	11.2	SSW	3	4688
-	13:00	c	10	7.9	SSW	3	4682
-	14:00	r	10	6.1	SSW	2	4692
-	17:00	c	10	8.2	SSW	1	4700
-	18:00	c	10	5.2	-	0	4700
-	19:00	c	9	4.6	-	0	4702
2日	5:00	s	10	2.0	-	0	4704
3日	6:00	c	8	-0.4	-	0	4704
-	7:00	fb	4	-3.2	SSW	1	4710
-	8:00	c	9	3.0	SSW	1	4712
4日	7:00	b	1	-3.2	SSW	1	4692
-	8:00	b	1	-2.8	SSW	1	4700
-	9:00	b	1	1.8	SSW	1	4690
7日	18:00	b	0	9.0	SSW	3	4612
-	19:00	b	0	7.3	SSW	3	4612
-	20:00	b	0	6.0	SSW	2	4610
-	21:00	-	-	1.5	-	-	-
8日	6:00	b	1	0.3	SSW	2	4600
-	7:00	fb	3	0.5	SSW	3	4612

[\[ページのトップへ\]](#)

表3 C2での気象

日 時	-	天気	雲量	気温 ()	風向	風力	高度計高度 (m)
8月8日	19:00	fb	3	3.2	S	3	5114
-	20:00	b	2	2.1	S	2	5112
-	21:00	b	2	3.8	S	2	5108
9日	6:00	fb	5	1.7	S	1	5112

-	7:00	b	2	1.0	S	2	5118
-	8:00	fb	6	7.8	-	0	5116
-	9:00	fb	4	9.1	S	1	5112
-	18:00	b	1	7.0	S	3	5118
-	19:00	b	0	4.3	S	3	5118
-	20:00	b	0	2.9	S	3	5116
10日	5:00	b	0	0.3	S	1	5130
-	6:00	b	0	0.2	S	1	5130
-	7:00	b	0	1.2	S	1	5132
-	8:00	b	0	0.0	S	2	5130
-	15:00	b	1	7.8	S	2	5124
-	16:00	fb	1	6.9	S	3	5132
-	17:00	fb	1	7.0	S	3	5134
-	18:00	b	1	4.5	S	2	5142
-	19:00	fb	1	2.0	S	3	5136
11日	6:00	fb	3	1.0	N	3	5165
-	7:00	fb	4	0.0	N	3	5152
-	8:00	b	2	0.0	S	3	5152

[\[ページのトップへ\]](#)

表4 C3での気象

日 時	-	天気	雲量	気温 ()	風向	風力	高度計高度 (m)
8月11日	16:00	s	10	2.8	-	0	5562
-	17:00	s	10	0.0	-	0	5562
-	18:00	s	10	-1.8	N	2	5540
-	19:00	s	10	-2.0	N	2	5550
-	20:00	s	10	-2.1	N	1	5550
12日	5:00	c	10	-2.0	-	0	5590
-	6:00	f	10	-2.8	-	0	5600
-	9:00	s	10	0.0	-	0	5590
-	10:00	s	10	0.5	S	1	5588
-	11:00	s	10	1.9	-	0	5586
-	12:00	曇	10	0.0	-	0	5584
-	13:00	曇	10	8.7	SSW	1	5582
-	14:00	c	9	7.9	SW	1	5592
-	15:00	s	10	6.0	SW	1	5588
-	16:00	s	10	1.4	-	0	5600
-	17:00	曇	10	0.0	SW	1	5602
-	18:00	f	10	-2.1	SW	2	5604
-	19:00	f	10	-2.2	SW	1	5602

-	20:00	s	10	-2.5	SW	1	5600
13日	4:00	b	0	-11.5	SW	1	5624
-	5:00	b	0	-9.8	-	0	5630
-	6:00	b	0	-7.5	-	0	5622

研究

準備中



Doda 周辺登山史

～ D.D.Gl. , Purl Gl.を中心として～

遠征年	山名, 山域	パーティ名	概要	文献、その他
1913	Z3 (6,270m) (Cima Italia)	Italy, M.Piacenza	D.D.Gl.より Z 3 に初登頂。	世界山岳地図集成
46	Donaki Gl. 踏査	Austria, F.Kolb	Donali Gl.に入り、Sicle Moonを望む。Sicle Moonとは『小鎌の月』の意。	HJ vol.14 (p.33)
65	Kiar nala, Nanth nala	UK . C.R.A.Clarke	Sicle Moonを始め、多くのピークに試登。'69にも入山した。	-
71	Sicle Moon (6,575m)	東農大 (4名)	9/15、Kiar nala より入山。9/23、SarbalにBCを定め、Sicle Moon Gl.から北西稜に取り付いた。C 3 を5,700mに伸ばすが、岩壁に阻まれ、敗退。10/19、撤収、下山。	報告書刊
73	Sicle Moon (6,575m)	自衛隊 (7名)	9/11、Kiar nala より入山。SarbalにBCを定め、Sicle Moon Gl. より、南西壁に取り付いた。C 3 (5,500m)を建設。頂上直下150mに迫るが雪崩により、登攀中止。2名負傷。	Joint Exp. 報告書刊
75	BrammerII (6,485m)	札幌山岳会	Nanth nala より、Brammer II峰初登頂。	報告書刊
76	Pk. 6,000 (Purl Gl. 源頭)	東京山旅倶楽部	8/20、Kiar nala より入山。8/29、Borgma(4,100m)に、BC建設。C 1 (4,500m), C 2 (4,800m)を建設するが、尾根を間違え、Pk. 6,000をめざした。当初の目的は、無名峰(6,560m)。	報告書刊
76	Doda (6,550m)	東洋大 大滝憲司郎	9/5、Doda川左岸にBC(4,320m)建設。なだらかな氷河を20kmほど遡り、C 1 (4,750m), C 2 (5,200m), C 3 (5,600m)を建設。一次隊は北稜、二次隊は北西面から初登頂。後、周辺調査。	報告書刊
77	Pk.6,560(?) (Prul Gl. 源頭)	甲南大 南里章二	Prul Gl.源頭のPk.6,560(?)を目指しRa 1 ung氷河で<活動。ルートが困難な為、周辺ピークに転進した。	'78甲南大時報13号
77	Pk.5,700 (ViewPoint Peak)	?, G.Cohen	8月、D.D.Gl.より PK.5,700に北稜から登頂。	HJ vol.42 (p.191) AJ vol.83 (p.206)
78	Z8 (6,050m) Z2 (6,270m)	Italy, ?	D.D.Gl.より、共に初登頂。	AAJ'78 (p.614)
78	Pk.6,000 (6,560?) (Prul Gl. 源頭)	UK . ?	登頂。日本製地図の6,560峰であるが、6,000mしかないと言う。Pk.5,638にも登頂した。	AAJ'78 (p.614)

78	Delusion (6,560m) Pk.5,700 (ViewPoint Peak)	UK . コリスター	登頂。詳細不明。	AJ'78 (p.206)
80	Z1(6,400m)	北大WV 大内倫文	Shafat Gl.より、Z1初登頂。	報告書刊
80	Pk.6,110 他 (D.D.GI)	Italy, A.Bergamaschi	7/30、BC(4,230m)を建設。放射状に五峰に 登頂。 ポローニャ隊。	'81山岳年鑑(p.70) HJvol.37 (p.198,213)
81	Z3 (6,270m) (Cima Italia)	Italy G.Agostino	登頂。日本人の遭難救援。	HJvol.38(p.180,202)
81	D.D.GI.踏 査	学習院大学 探検部 (2名)	8/7、D.D.GI.舌端 にBC(4,000m)、/8、C1(4,700m)を建設。 /10、氷河の奥の峠を越えるつもりで更に上 流に向かい、1名クレバスに転落、死 亡。/14、ヘリで遺体搬出。無許可登山 だった。	岩と雪 vol.87 (p.52)
83	Pk.6,550 (Doda) 他	UK . Edinburgh Univ.(2 名)	Pk.6,550m, 6,000m, 5,600mに登頂。	'84山岳年鑑(p.59) HJ vol.42 (p.191)
83	Z3 (6,270m) (Cima Italia)	Italy	登頂。'81 Exp.と同じ(?)	83山岳年鑑(p.57)
83(?)	Pk.6,225m	Alan Hunt	Barnaj nalaより Pk.6,225mとのcolを通 り、Zanskarに抜けた。	HJ vol.42 (p.191) AJ vol.89 (p.37)
83(?)	Z8(6,050m)	Irish, J.Lynm	西稜より登頂。	Irish Climber,vol.30
84	Rahamo (6,000m) Z3 (6,270m)	独協大 三木茂総	8/5、Pensi La(4,101m)下にBCを建 設。/9、ABC(4700m)、/13、C2(5200m)を建 設。/17、Rahamo に初登頂。続い て、/29、Z3にも登頂した。	'85山岳年鑑(p.68) 報告書刊 HJvol.42(p.186)
85	Pk.6,550 (Doda)	India, C.Nagaraju	詳細不明。8月に活動。	'86山岳年鑑(p.84)
86	Pk.6,150	東京都 高体連 高橋清輝	8/6、D.D.GI.末端にBC(4,320m)建 設。ABC(4,700m)、C1(5,350m)、C2(5,500m) とし、8/15、北稜より登頂。	'87山岳年鑑(p.88)
87	Z8(6,050m)	東京学芸大 竹本哲雄	8月、D.D.GI.より入山。失敗。詳細不明。	'88山岳年鑑(p.91)
-	Lhalung (6,500m) (D.D.GI.)	France, M.Dominique	8月、D.D.GI.より入山。失敗。詳細不明。	同上。
89	Pk.6,150 (D.D.GI.)	Swiss, H.Nave	マウンテンパイクにより、入山。8/8,BC(4,700m)建 設。8/16、5,650mのキャンプより北稜から登 頂。	'90山岳年鑑(p.95)
92	Z3 (6,270m)	Italy, S.Maturi	8/16、北西稜より登頂。	-

協力者芳名録 (五十音順、敬称略)

(企業・団体)

味の素株式会社札幌支店
大塚製薬株式会社
帯広わらじの会
株式会社永谷園
東京山旅倶楽部
東洋水産株式会社札幌工場
独協大学山岳部
日本ジフィー食品株式会社

(個人)

秋葉公太	岡田尚武	杉野目浩	樋口和生
阿部 淳	岡本丈夫	須崎伸彦	平田更一
荒生繁雄	小河 孝	鈴井格仁	福尾克也
有波敏明	沖 允人	鈴木弘泰	藤田雅弘
有馬 純	梶川耕司	須田長良	藤森 元
安藤朝夫	神谷正男	住吉幸彦	古田 進
安藤久男	河合範雄	関 和人	益田 稔
安間 元	岸本正彦	銭谷竜一	松下彰夫
飯尾賢二	北古味雄	高久芳衛	松田 彊
池上宏一	北村一夫	高田敦徳	松本伊知朗
石井宇一郎	木村恒美	高田寛之	三尾龍民
石井清一	木村俊郎	高橋清輝	水上定一
石川達雄	工藤哲靖	高橋龍彦	宮地隆二
石島行三	熊野純男	高原昌也	宮本達也
石田隆雄	黒川 武	高松秀彦	向山 栄
石橋英二	小泉章夫	竹田英世	毛利立夫
石橋岳志	小枝一夫	田中健太郎	元木暉里
伊藤伸一	越野 正	戸田英明	森実 裕
伊藤紀克	小林 年	中島秀雄	八木欣平
伊藤 宏	駒澤欣一	永光俊一	安田一次
井上春喜	斎藤清克	中村豊彦	柳沢盛雄
伊吹良太郎	坂本浩輔	中村晴彦	矢作栄一
今村昌耕	佐々木幸雄	長坂昭憲	山口 斌
今村正克	佐藤貴美子	名越昭男	山口義明
入沢崇男	佐藤 弘	成田哲也	山崎信男
上杉寿彦	佐藤行郎	新妻 徹	山田 透
植田勇人	三瓶 修	西 信博	山田真弓
上野八郎	志賀弘行	西 安信	湯川龍二
内田武彦	芝山良二	丹羽由紀夫	吉田 勝
大井幸雄	渋谷一正	野田四郎	吉村啓一
大内倫文	清水 収	野村 睦	若尾和也
太田 肇	清水 徹	橋本芳郎	渡辺 勇

大滝憲司郎 下沢英二 花井 修 渡辺眞之
大森 信 末武晋一 浜名 純
岡島伸浩 杉 穎夫 東 晃

(遠征隊事務局)

松田 彊 事務局長
清水 収 副事務局長
工藤哲靖
樋口和生
柳沢盛雄
田中健太郎
中村一郎
内田隆史 現役主任幹事

回想（最後に）

製本版報告書の巻末より

インド・ザンスカールの山旅から半年が経ちました。結成時からよろめいていた遠征隊でしたが、なんとか出国でき、山にも登ることができました。カルギルからヌン・クンの山容を見ながらバスに揺られていると、十勝岳温泉む向かっているのと何も変わらないな、と感じたことを思い出します。

遠征報告書の形態に関しては、はじめはビデオも考えましたが、このグラフィア形式に落ち着きました。グラフィア部分には、写真をきりはりし自らコピーしたため、多少みにくいところがありますが、ご勘弁願います。安く、かつわかりやすいように心がけましたが、やはりプロの印刷屋さんにはかなわないようです。ただ、形どおりの報告書にしなかったことにも、この遠征隊の性格が出ているのかもしれない。

最後になりましたが、今回ご援助、ご支援くださった関係各位、先輩諸兄に厚く御礼申し上げます。

Web版の最後に

というわけで、隊長の辺見君が私のところに原稿の入ったフロッピーディスクと写真を持ってきたのがゴールデンウィーク明けのとある午後でした。最近はずっかりMicro\$oftの最新バージョンが幅を効かせていて、古いバージョンの私のMac君では直接ファイルを読み込めず、特にTEXT化された表の作成には非常に苦労しましたが、まあ、なんとか形になりました。

製本版では白黒コピーの写真もWeb版ではカラーで見られます。この報告書は文書が今一のこともとあって、写真こそが命ですから、ちょっとファイルが重くて読み込みに時間がかかるのは我慢して、存分に色彩の世界を楽しんで下さい。

Web版 編集 T.Sawagaki





